

長野県松本市

I DEGAWAMINAMI

出川南遺跡

—第15次発掘調査報告書—



2011.3

松本市教育委員会

長野県松本市

I DEGAWAMINAMI

出川南遺跡

—第15次発掘調査報告書—

2011.3

松本市教育委員会

例言

1 本書は、平成 21 年 8 月 27 日～平成 22 年 1 月 28 日に実施された、長野県松本市芳野 179 番 126、179 番 127、179 番 128 に所在する出川南遺跡第 15 次調査の緊急発掘調査報告書である。

2 本調査は、長野県による県営住宅南松本団地建設事業（12 号棟）に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会で発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。

3 本書の執筆は、第Ⅲ章第 3 節 1：直井、第Ⅲ章第 3 節 2：石井、その他：福沢が行った。

4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記 中澤温子、百瀬二三子、山口明子

遺物保存処理・接合復元 佐々木正子、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、山口明子

遺物実測・トレース・版組み（土器）竹内直美、竹平悦子、八板千佳

（金属製品）洞沢文江

（石製品）石井佑樹

遺構図整理・トレース・版組み 村山牧枝

写真撮影（遺構）石井佑樹、福沢佳典

（遺物）宮崎洋一

編集・総括：福沢佳典

5 整穴住居址については出川南遺跡第 1 次調査から通して番号を付し、その他の遺構については本次調査で 1 号から番号を付している。

6 本書で用いた略記は次のとおりである。

第○号住居址→○住、第○号土坑→○土、ピット○→P○

また、単独のものは「P 1」、住居址付属のものについては「P 1」のように記し区別した。

7 図中で用いた方位記号は真北であり、座標は国土地理院告示の平面直角座標系に準拠した。また、標高・水平基準は東京湾平均海面水準（T.P.）である。

8 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。

9 本書では以下のものをスクリーントーンで表した。

遺構：焼土・被熱範囲



遺物：黒色處理



10 遺構図は S=1/80、詳細図は S=1/40 で掲載した。遺物図は、土器：S=1/4、石製品および鉄製品：S=1/2 または S=3/4 で掲載した。

11 遺構・遺物の記述で用いた古代の土器の種別・器種・時期区分等は、次の文献による。

（財）長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 - 松本市内その 1 - 総論編』

12 土器実測図において、断面白抜きは土師器・黒色土器、断面黒塗りは須恵器とした。

13 本調査における出土遺物および測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒399-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に保管・収蔵されている。

目次

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経緯	3
第1節 調査経過	
第2節 調査体制	
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 地理的環境	
1 出川南遺跡付近の地形・地質の概観	
2 発掘調査地点の地形・地質	
第2節 歴史的環境	
第3節 過去の調査	
第Ⅲ章 調査成果	11
第1節 調査の方法	
第2節 遺構	
1 概要	
2 壊穴住居址	
3 上坑	
4 溝	
5 石積遺構 1	
第3節 遺物	
1 土器	
2 石製品	
3 鉄製品	
第Ⅳ章 総括	48
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	第15次調査区壁面の土層断面図 (S=1/80) ······	5
第2図	調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/25,000) ······	6
第3図	過去の調査地点 (S=1/10,000) ······	8
第4図	15次周辺の調査区 (S=1/2,500) ······	9
第5図	調査区の位置 (S=1/1,000) ······	10
第6図	遺構配置図 (S=1/400) ······	12
第7図	遺構 (1) ······	20
第8図	遺構 (2) ······	21
第9図	遺構 (3) ······	22
第10図	遺構 (4) ······	23
第11図	遺構 (5) ······	24
第12図	遺構 (6) ······	25
第13図	遺構 (7) ······	26
第14図	遺構 (8) ······	27
第15図	遺物 (1) ······	40
第16図	遺物 (2) ······	41
第17図	遺物 (3) ······	42
第18図	遺物 (4) ······	43
第19図	遺物 (5) ······	44
第20図	遺物 (6) ······	45
第21図	遺物 (7) ······	46
第22図	遺物 (8) ······	47
第23図	遺構分布図 (古墳時代後期) ······	50
第24図	遺構分布図 (奈良時代) ······	51
第25図	遺構分布図 (平安時代前期) ······	52

表目次

第1表	過去の調査一覧 ······	9
第2表	堅穴住居址一覧 ······	18
第3表	土坑・ピット一覧 ······	18
第4表	溝一覧 ······	19
第5表	土器觀察表 ······	35
第6表	石製品觀察表 ······	39
第7表	鉄製品觀察表 ······	39

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査経過

出川南遺跡は松本市街地の南、双葉から芳野地区に広がる遺跡である。昭和 61 年に第 1 次発掘調査が行われて以来、これまで 14 次にわたる調査が実施されている。今回報告する第 15 次調査は、長野県住宅課による県営住宅南松本団地建設事業（12 号棟）に伴う緊急発掘調査である。平成 21 年 4 月 27 日付で、文化財保護法第 94 条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が長野県教育委員会に提出された。今回の事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である出川南遺跡に該当しており、事業地周辺においても緊急発掘調査が行われていることから、埋蔵文化財を包蔵していることが予想された。松本市教育委員会では、建設工事の際に遺跡が破壊される恐れがあるため、5 月 1 日に出川南遺跡に関する保護意見書を長野県教育委員会教育長に提出し、5 月 18 日付で埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査実施の通知を受けた。その後、事業者である長野県住宅課と協議を行い、発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成 21 年 8 月 4 日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成 21 年 8 月 27 日～平成 22 年 1 月 28 日に実施した。調査終了後、平成 22 年 2 月 3 日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日、埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成 22 年 2 月 17 日付で長野県教育委員会教育長より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け、10 月 6 日に出土文化財譲与申請書を長野県教育委員会教育長に提出し、10 月 15 日出土文化財の譲与についての通知を受け、10 月 21 日付で出土文化財の受け入れを行った。

出土遺物及び測量図・写真等の調査記録の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行い、本書の刊行に至る。

第2節 調査体制

調査団長：伊藤 光（松本市教育長）

平成 21 年度（発掘調査）

調査担当者：福沢佳典、石井佑樹

発掘協力者：朝倉秀明、石川一男、今井太成、加藤朝夫、金井秀雄、猿楽あい子、清水陽子、曾根原裕、高山知行、茅野信彦、中嶋 健、中村 明、三谷久美子、宮澤昭敬、百瀬二三子、山田 茂

平成 22 年度（報告書刊行）

報告書作成：直井雅尚、福沢佳典、石井佑樹

調査員：宮崎洋一

整理協力者：荒井留美子、柏原佳子、久根下三枝子、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、白鳥文彦、洞沢文江、前沢里江、百瀬二三子、村山牧枝、八板千佳、山口明子

事務局：松本市教育委員会文化財課

小穴定利（課長～平成 22 年 3 月）、塙原明彦（同 平成 22 年 4 月～）

大竹永明（課長補佐 球藏文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、

小山高志（主任～平成 22 年 3 月、主査 平成 22 年 4 月～）、柳澤希歩（嘱託）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

1 出川南遺跡付近の地形・地質の概観

出川南遺跡が立地する付近一帯は、古くは広い畠地で小麦・桑が栽培されていた。第2次世界大戦末の工場疎開による工業団地造成、南松本駅新設により、土地の削平、平坦化、客土が行われ、その様相を一変させた。戦後、食糧不足・食料増産のため土地造成が行われ広く水田化したが、1963年の国道19号線の開通に伴い商業地及び宅地として市街地化が著しい。そのため現在、原地形の確認は困難である。

遺跡周辺の標高は593～598mで、東方約500mに田川、西方約2200mに奈良井川が北流するため、南から北に向かってわずかに低くなっている。地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する合流扇状地の末端に位置しており、調査地の北東ないし北西方約500mには多くの湧水がみられ、特に北方の穴田川・頭無川沿いは沼沢性の沖積地である。調査地周辺でも地下水位は2.2～6.9mが報告されている。

過去の調査成果からは、基底礫層は奈良井川系統（古生層系統）で共通しており、調査地点によって上層の堆積層が田川・牛伏川系統と奈良井川系統に分けられる。これらの氾濫や乱流により複雑な堆積状況を呈し、砂礫層の間には雨水・小流により洗い出された砂質土・粘質土の間層が形成され、遺跡が立地する面となる。出川南遺跡第1・6・8次調査地点では弥生時代後期～古墳時代中期、古墳時代後期～平安時代の上下2面の遺構面が確認されている。

2 発掘調査地点の地形・地質

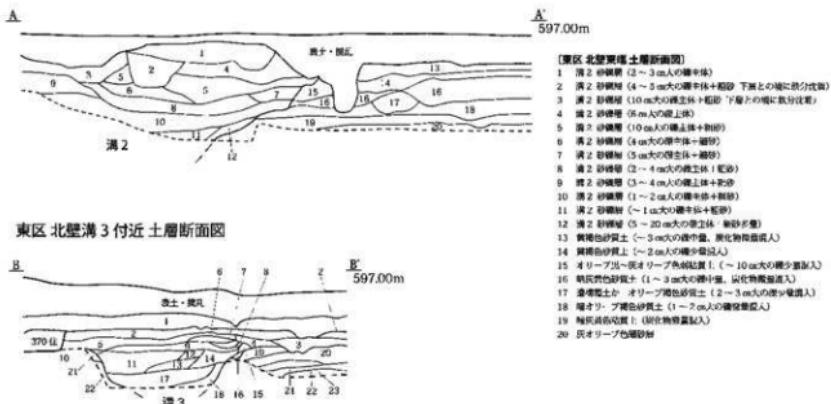
今回の発掘調査地点は松本市芳野179番126ほかにあり、県営住宅南松本団地の敷地内である。第14次調査地点の北に位置する。付近の標高は596.8m前後である。調査開始時は、旧県営住宅B4～B7棟解体後の更地となっていたが、現地表面では微地形は確認できない。上述のように、調査区周辺は複雑な堆積状況であるが、調査区壁面の土層断面図（第1図）および遺構断面図の観察から調査区の上層堆積状況は述べる。

全ての地区において搅乱が激しく、東区は概ね現地表面から約0.5mまで現代の表土・搅乱層である。深いところでは約1.4mまで達し遺構を破壊している。調査当初、東区北壁の東端付近を基本土層として土層の観察を行っていたが、石積遺構1検出後、他の地点とは上層が異なることが判明した。搅乱の下、地表面から約1.2mまでは1～10cm大的の礫が混入する黄褐色～暗灰黄色砂質土層が堆積する。これらは遺物を含まないが、同じく石積1の内側の堆積を表す東壁中央（第13図）では確認できず、溝2より西側でも確認できないため石積1に関する土層の可能性がある。18層より下は自然堆積層と考えられる。

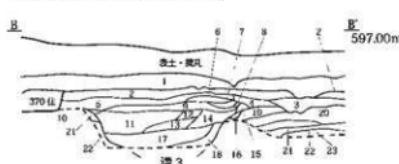
東区は概ね地表面から約0.7～0.8m下の暗オリーブ褐色砂質土層を遺構検出面とした。それより下層は粘質土層をはさんで細砂層となる。遺構断面上層などの観察によると、わずかに西に向かってこれらの層は高くなっている。そのため、東区の検出面の土相は溝3付近から東西で様相が異なり、西側では黒褐色弱粘質土層（溝3付近断面図の2層）または、暗灰黄色弱粘質土層（同5層）が遺構面となっている。鉄分を多く含むためか東側の19層に比べて暗くなる。

西区も現地表面から約0.5mまで表土・搅乱層である。東区同様に深いところでは約1.4mまで達している。搅乱層の下に灰～灰オリーブ色弱粘質土層をはさみ、褐色鉄分が多量混入する黄灰～暗灰黄色弱粘質土層（5層）が堆積する。5層の上面を遺構検出面とした。地表面から約0.7mである。約0.9m下から砂質土層（12層）が堆積し、約1.0mから下は砂礫層（15層）に変わるものである。また、奈良・平安時代遺構面の一層下の暗灰黄色弱粘質土層（7層）の上面で372住および27十といった古墳時代後期の遺構が検出されたため、古墳時代の遺構面とした。なお、3層から掘り込まれる遺構もあるが、近世陶器が出土している。

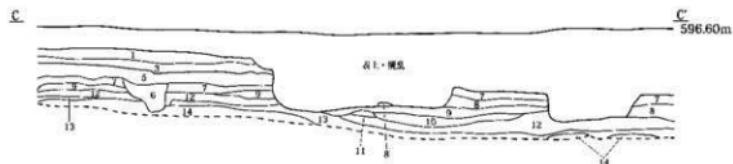
東区北壁東端 土層断面図



東区北壁溝3付近 土層断面図



西区 西壁南端 土層断面図

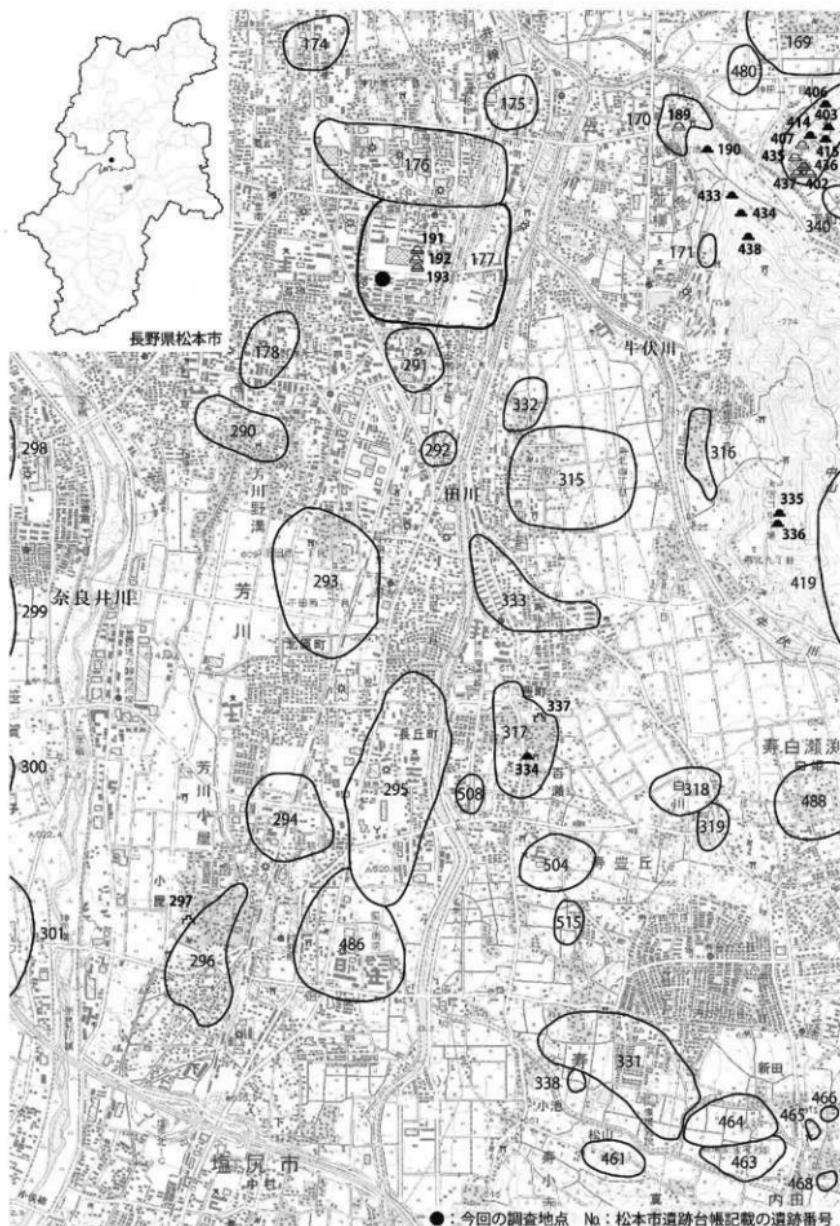


西区 南壁東端 土層断面図



- 西区 西壁南端 土層断面図**
- 1 黄オーリー層・砂礫層（~2cmの大粒の砂礫層・栄養物供給量入）
 - 2 游走・砂礫層（~1cmの大粒の砂礫層・根分少量・栄養物供給量入）
 - 3 寒流・砂礫層（弱分界面層）
 - 4 寒流層上・薄黄褐色粘土（低砂粘土・少量混入）
 - 5 黄灰褐色粘土層（弱分多量入・上層との境が埋積傾向）
 - 6 游走・砂礫層（~1.5cmの大粒の砂礫層・底付粘土上中量混入）
 - 7 黄灰褐色粘土層（秋色粘土・少量混入）
 - 8 黄灰褐色粘土層（秋色粘土・少量混入）
 - 9 黄灰褐色粘土層
 - 10 黄灰褐色粘土・先端部（~1cmの大粒の砂礫層・根名粘土上中量混入）
 - 11 黄灰褐色粘土（~1cmの大粒の砂礫層）
 - 12 黄オーリー層・砂礫層（秋色粘土・少量混入）
 - 13 黄オーリー・薄色の砂質土
 - 14 砂礫層（高砂多量入）
 - 15 砂礫層（高砂多量入）

第1図 第15次調査区壁面の土層断面図 (S=1/80)



第2図 調査地の位置と周辺遺跡 ($S = 1/25,000$)

遺跡地図掲載遺跡

遺跡名 : 169 神田 170 平畠 171 山行法師 174 高宮 175 出川 176 出川西 177 出川南 178 五輪 290
291 平田北 292 平田 293 平田本郷 294 小原 295 高畠 296 小屋 298 下二子 299 中二子
300 上二子 301 神戸 315 竹渕 316 百瀬 317 百瀬 318 白川 319 野田 331 小池 332 竹渕南原
333 向原 340 生妻 461 松山 463 エリ穴 464 一ツ家 465 くねの内 466 八幡原 468 長泉寺
480 神田西 486 村井 488 白姫 508 海南久保 504 百瀬南 515 北起こし

古墳名 : 189 平畠1号 191 平田里1号 192 平田里2号 193 平田里3号
419 中山古墳群 190 弘法山(中山48号) 402 中山31号 403 中山32号 406 中山35号
407 中山36号(仁能山) 414 中山58号 415 中山59号 433 中山北尾根1号 434 中山北尾根2号
435 桜謹山1号 436 桜謹山2号 437 桜謹山3号 438 中山北尾根3号
334 耳塚 335 長峰下1号 336 長峰下2号

城館址 : 297 小屋城址 337 百瀬の陣屋 338 小池野址

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には数多くの遺跡が立地し、田川右岸、田川と奈良井川に挟まれた地域、奈良井川左岸の大きく3つの遺跡群に分けられる。

縄文時代は、山川・奈良井川間の地域では現在、遺構・遺物は確認されておらず、田川右岸および奈良井川西岸では遺跡が確認されている。特に田川右岸の山寄りの地域では、百瀬遺跡第2次調査で早期の押型銅土器と若干の上坑が確認されている。その後、小池、一ツ家遺跡は中期、エリ穴遺跡は晩期に多量の耳飾りが出土する大規模集落が営まれている。

弥生時代中期以降になると、百瀬、竹渕、竹渕南原遺跡で規模の大きな集落が営まれる。中でも百瀬遺跡は、弥生時代中期末の百瀬式の標識遺跡として重要である。田川・奈良井川間の地域においても中期前葉～中葉に田川、出川西、平田北遺跡で遺物・遺構が確認されており、この地域の開発の初源といえる。後半になると、出川南遺跡でも住居址や遺物が確認され始め、墓域が形成されていた可能性もある。

占墳時代前期には、高宮遺跡で弥生時代後期後葉の箱清水式の名残を残すような甕や、東海系のバレス甕が出土しており、出川南遺跡でも東海系の占墳前期の土器や住居址が確認されている。東方約1.5kmの中山丘陵突端には前期の前方後方墳である弘法山古墳が築かれており、この地域一帯が造営集団の主力と考えられるが、いまだまとまった集落は発見できていない。

中期になると、出川西遺跡で住居址2軒、配石造構が7基、土器集中地点が19カ所確認されている。北東に位置する高宮遺跡でも土器集中地点が15カ所確認されている。ミニチュア土器や下類、模造石製品、鉄劍・鉄劍などが出土しており、これらはほとんど細り込みを持たないような浅い凹地状地形の縁や底面に置かれている。また、十器群によっては高杯のみで構成されており、廐棄跡ではなく祭祀遺構と考えられる。該期の住居址も3軒確認されているが、この一帯が祭域として使用されていた段階があるようである。また、出川南遺跡第4次調査地点では平田里古墳群(1~3号古墳)の円墳3基が調査されている。1号古墳は5世紀後半~6世紀初頭と考えられ、周溝から出土した多量の円筒埴輪・形象埴輪と馬具類は県内でも貴重な資料である。後期は、出川南遺跡で大規模な集落が営まれ、松本山内でも最大規模の集落跡である。

奈良時代になると、出川南遺跡の南側から平田北遺跡にかけて集落が展開する。古墳時代後期に比べると規模が縮小しているようであり、平安時代前期になると、出川南、平田本郷遺跡、さらに南では小原、吉田川西遺跡など拠点的な集落が拡散・立地し始める。これらは交通の要衝に位置するようになったためと考えられ、中世に統く集落も存在する。

第3節 過去の調査

本跡はこれまでに14次の発掘調査が実施されている。各調査地点の位置を第3・4図に、調査成果の概要を第1表に示した。

第1次調査は昭和61年に行われ、南北2地区で弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居址が2軒、平安時代の堅穴住居址が3軒確認されている。弥生時代後期前半に属する第4号住居址では、磨製石器3点、未製品8点および砥石などが出土しており、壁際に拳大の礫が多く出土していることからも、小工房的な性格も推測されている。また、堅穴状構造3は溝を伴う土坑であり、溝中から遺物が集中して出土した。遺物は土師器の器台、壺の他に赤色彫飾された高杯、壺、甕などがあり、方形周溝甕の可能性もある。平安時代後期に属する第3号住居址では浮岩製の浮子が1点出土している。出川西遺跡でも平安時代の住居址から土鍤が約20点出土しており、田川を漁場としていたとも推測できる。

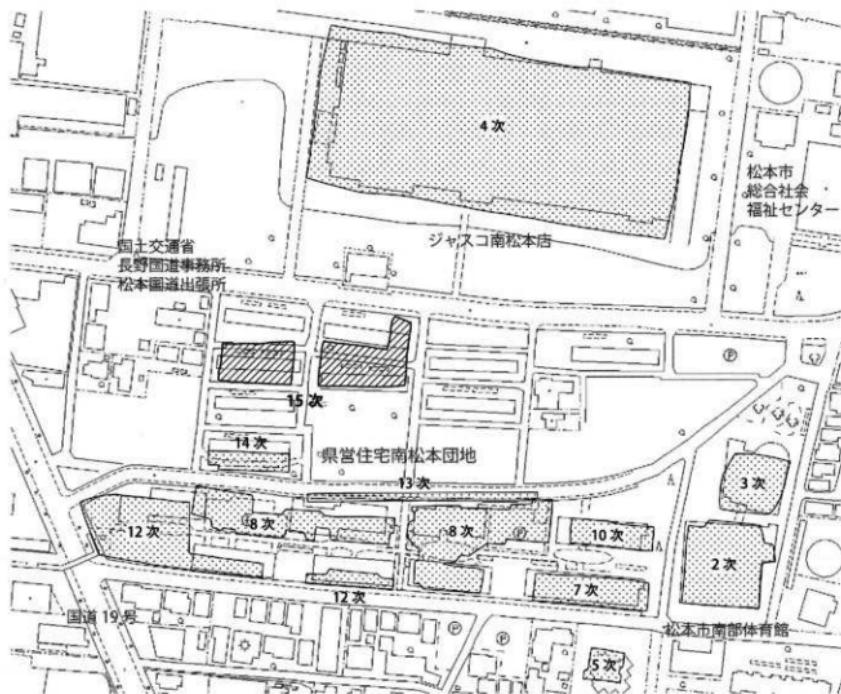
平成3年に行われた第4次調査では、古墳時代後半から平安時代後半にかけて116軒の堅穴住居址が確認されている。古墳時代後期の住居址は113軒で、6世紀後半～7世紀後半まで4段階の変遷を追うことができる。付近一帯に比較的規模の大きな集落が展開していることが明らかになっている。掘立柱建物址21棟も古墳時代後期に属するもので、数軒の堅穴住居址とセットになりひとつの単位を構成していると考えられる。

また、調査区東端では平田里1～3号古墳（第2図191～193）が確認された。これらは中期後半～末に築造されたものと考えられ、周溝からは埴輪をはじめ周溝内祭祀に使用された遺物が多数出土している。特に1号古墳は平地に築造された松本平の古墳の中では最大規模のものである。5世紀後半以降の首長墓の展開を考えていく上で重要な資料と位置づけられる。

今回の15次調査地点周辺では、第4次調査を含め10次にわたる発掘調査が行われている。古墳時代後期～平安時代後期までの堅穴住居址253軒、掘立柱建物址25棟、土坑401基、自然流路を含む溝24条などが確認されている。また、第8・12次調査では縄釉陶器の生地、第5次調査でも美濃須衛窯、尾北窯産など東海系の須恵器蓋・杯や、畿内系暗文杯などの搬入品も一定量見られる。古墳時代中期の平田里古墳群と同時期の住居址はまだ確認できていないが、古墳時代後半の大規模な集落から平安時代後期にかけて存続した集落として、松本市域でも重要な遺跡であることが明らかになっている。



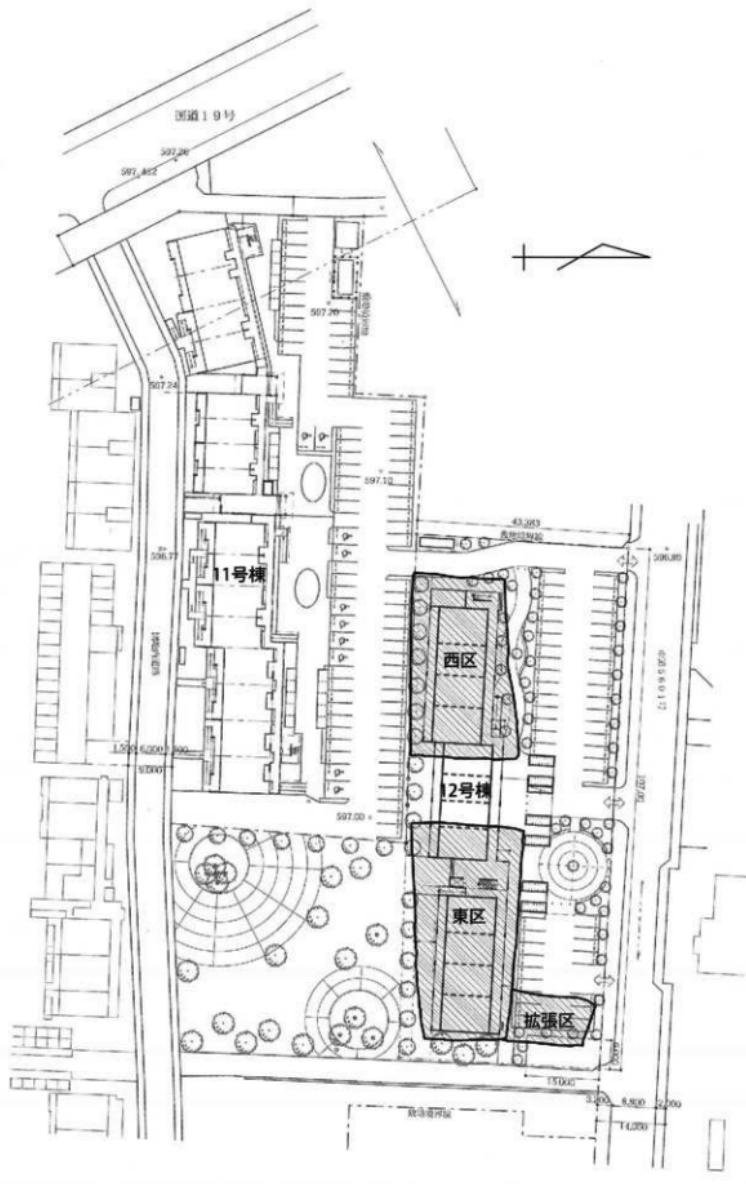
第3図 過去の調査地点 ($S=1 / 10,000$)



第4図 15次周辺の調査区 (S=1 / 2,500)

第1表 過去の調査一覧

調査次	実施年度	面積	調査成果	備考
1	昭和61年 (1986)	1325m ²	住居址5 (弥生後期1、古墳前期1、平安前期1、平安後期2) 掘穴状遺構3、搬立柱建物址1、土坑1、溝1	遺構面2面。上が平安、下が弥生後期-古墳前期。
2	昭和63年 (1988)	1715m ²	住居址1 (古墳後期) 土坑26、ピット61、溝1	
3	平成元年 (1989)	900m ²	住居址6 (古墳後期-平安前期)	
4	平成3年 (1991)	14688m ²	住居址116 (古墳後期113、平安前期2、平安後期1) 掘立柱建物址21、柱列2、土坑7、ピット多数、溝11	平田里1→3号古墳（中期古墳）も調査。
5	平成10年 (1998)	281m ²	住居址11 (古墳後期2、平安前期5) 土坑6、ピット11	
6	平成10年 (1998)	1486m ²	住居址4 (弥生後期前半3、古墳後期1) 堅穴状構2、搬立柱建物址3、土坑3、ピット55、溝6	遺構検出面2面。上が古墳後期以降、下が弥生後期。
7	平成10年 (1998)	867m ²	住居址56 (古墳後期-奈良11、平安前期39)、搬立柱建物址1、土坑175、ピット13、構2、遺物集中2(古墳前期)	
8	平成11年 (1999)	3293m ²	住居址48 (古墳後期7、奈良8、平安前期14)、搬立柱建物址1、土坑144、構1、遺物集中2 (古墳中期)、自然流路2	遺構検出面2面。上が古墳後期以降、下が古墳時代中葉。
9	平成11年 (1999)	240m ²	住居址2 (古墳後期) 土坑4、ピット7、遺物集中2 (古墳前期)	
10	平成11年 (1999)	560m ²	住居址4 (平安前開) ピット5、構1	
11	平成13年 (2001)	188m ²	住居址3 (弥生後期1、平安中-後期2) 土坑7 (火葬施設1)、ピット232、構1、自然流路2	遺構検出面3面。上が平安後期-中世、中が古墳時代中葉、下が弥生時代後期。
12	平成13年 (2001)	2197m ²	住居址13 (古墳後期2、奈良8、平安前期2)、土坑34、ピット70、構1	
13	平成14年 (2002)	25m ²	住居址2 (時期不明2)	トレンチ調査。
14	平成19年 (2007)	383m ²	住居址2 (古墳後期2)、搬立柱建物址2、土坑9 ピット11、溝2遺構5	



第5図 調査区の位置($S = 1/1,000$)

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査の方法

調査区の設定 調査開始時に、調査地の南側隣接地において県営住宅南松本団地 11 号棟建設工事が行われていたため、調査予定地のほぼ中央に機材搬入路が設けられていた。そのため、搬入路の東西で 2 地区の調査区を設定し、東区から調査を開始した。掘削範囲は県営住宅 12 号棟建設工事により掘削される範囲より約 2 m 広く設定した。

また、東区の北東隅で検出された石積遺構が調査区外に続くと予想されたため、範囲・規模を確認するために、県営住宅 12 号棟の範囲外であるが拡張区を設定、確認調査を行った。

調査面積は、東区 904.4 m²、西区 768.6 m²、拡張区 165.8 m²の合計 1838.8 m²である。

各区の発掘調査期間は以下のとおりである。

東区：平成 21 年 8 月 27 日～平成 21 年 11 月 28 日

西区：平成 21 年 12 月 2 日～平成 22 年 1 月 26 日

拡張区：平成 22 年 1 月 8 日～平成 22 年 1 月 28 日

発掘手順 大型建設用機械バックホウにより東区南縁に沿ってトレーナーを設定し掘削、土層の堆積状況を確認した。その結果、地表下約 0.7～0.8m を遺構検出面とし、面的な掘り下げを行った。その後人力により遺構検出を行い、写真撮影・図面記録後に掘削調査を行った。遺構番号は、調査時には遺構の種別・調査区を問わず通し番号を付し、整理時に遺構の種別ごとに番号を付した。堅穴住居址は出川南遺跡第 1 次調査からの通し番号を付し、その他の遺構は今回の調査で 1 号から通し番号を付した。

東区調査終了後、西区も同様に南・西縁に沿ってトレーナーを掘削し、地表下約 0.7m を遺構検出面とし面的な掘り下げを行った。

各遺構の調査終了後、調査区ごとに完掘状況の全景写真を撮影し、バックホウにより埋め戻し作業を終了した。
測量 調査地に近接する用地・工事測量用に設定された測量用基準点から調査地内に世界測地系平面直角座標・標高を移設し、基準点とした。平面図はこれをもとに、簡易遺り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図は原則 S=1/20 で作成し、詳細図が必要なものは S=1/10 で作成した。

出土遺物のうち遺構の覆土上層のものは、住居址のような大きな遺構は 4 分割した区画ごとなど、出土位置が把握できるように一括取り上げ、下層および床面直上出土のものは詳細出土状況図を作成し、標高を記録し取り上げた。

写真記録 調査区全景、土層・遺構の状況、遺物出土状況等は、35 mm 一眼レフカメラ（リバーサル、白黒フィルム）とデジタルカメラで撮影した。調査区全景については、ローリングタワー 6 m を使用し撮影を行った。

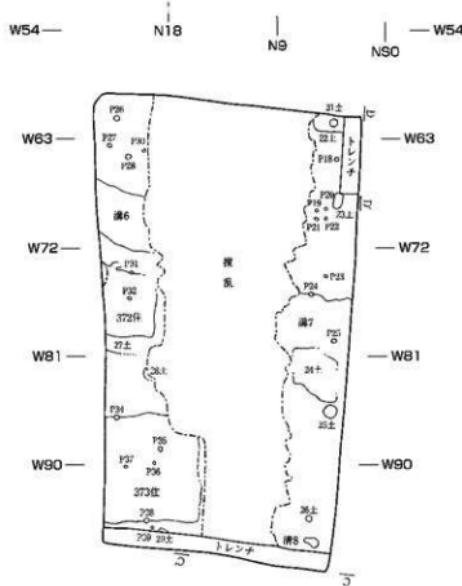
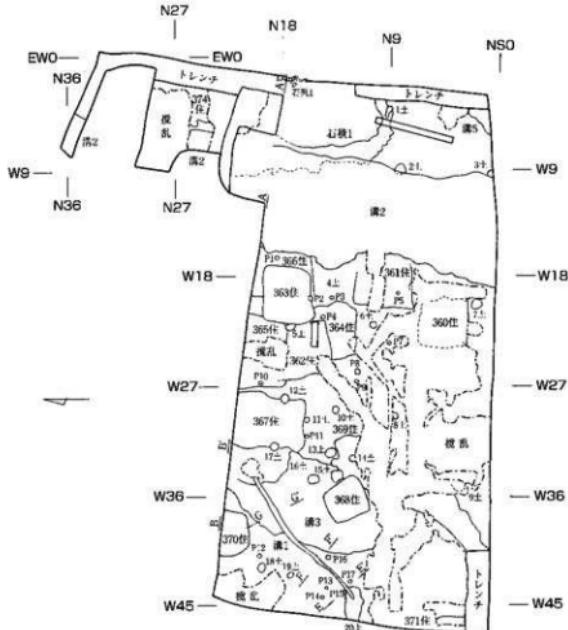
整理作業 発掘作業に並行して写真・図面等の整理を行った。図面類は平面図・土層断面図の点検・照合を行い、報告書に掲載するものについてはト雷斯作業を行った。遺物は洗浄・クリーニング後、接着作業を行い、遺存度の良好なものと特徴的な遺物について実測・ト雷斯を行った。

調査成果 発掘と整理作業の結果、以下の遺構が確認された。その概要是、第 2～4 表および卷末の発掘調査報告書抄録に掲載している。

東区：堅穴住居址 12 軒、土坑 20 基、ピット 17 基、溝 5 条（自然流路 4 含む）、石積遺構 1 基

西区：堅穴住居址 1 軒、土坑 9 基、ピット 22 基、溝 3 条（自然流路 1 含む）、集石 1 基

拡張区：堅穴住居址 1 軒（東区から続く溝 1 条、石積遺構 1 基）



第6図 遺構配置図 ($S=1 / 400$)

第2節 遺構

1 概要

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代前期の堅穴住居址を15軒確認した。古墳時代後期が2軒(371・372住)、奈良時代が4軒(368～370・373住)、奈良時代末～平安時代前期が9軒(360～367・371住)である。東区に集中し、遺構の重複からも今回の調査地から北東にかけて集落が広がっていたことが明らかである。溝8条のうち、確実に人為的なものは溝1であり、溝6・7も人為の可能性がある。その他は砂礫層主体の覆土であり、自然流路と考えられる。過去の調査においても自然流路が確認されており、付近一帯は氾濫原で洪水時の痕跡が地表下に残っている。土坑・ピットは遺物の出土が少なく、性格を明らかにできるものは少ない。また、掘立柱建物を構成するものもなかった。今回の調査で検出した堅穴住居址は掘り方内部に柱穴を確認できなかつたものが多い。土層断面で明確な柱痕を確認できなかつたが、住居址に近接するものは住居付属のものであるかもしれない。

2 堅穴住居址

(1) 第360号住居址

東区の南東に位置する。旧県営住宅の基礎等で搅乱され、検出面では南辺のプランしか確認できなかつた。そのため、搅乱を除去し検出面より約0.2m下で北・西辺のプランを確認した。

カマドは西壁中央に位置する。掘削中も被熱礫はほとんど出土しなかつたが、左袖部に元位置を保つた状態の被熱礫が出土しており、右組カマドと推測される。また、東壁中央にも被熱面が検出されたが、360住の櫛七中にあることから、別の住居址のカマドの可能性が高い(焼上1)。住居内ピット、貼床は確認できない。

出土遺物の総量は1,826gである。全体的に遺物の出土はまばらであるが、カマドが位置する西半の櫛七から最も多く出土している。床面およびカマド内からの出土は少ない。

(2) 第361号住居址

東区の南東、360住の北東に位置する。旧県営住宅に搅乱され、P5に切られる。また、東側は溝2に切られ、壁は残っていない。

カマドは東側、溝2の堆積層の下より検出した。被熱面を中心に被熱礫が散在し、周囲には焼土・炭化物粒が集中分布する。右組カマドと考えられる。また、カマド脇からは完形の須恵器杯A(第15図11)が伏せた状態で出土している。住居内ピットではなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は2,612gである。カマドの周辺に集中して出土し、北西隅の櫛土上層から完形の黒色土器杯A(第15図6)が出土している。

(3) 第362号住居址

東区の中央北寄りに位置する。本址は5軒重複する中のひとつである。平面プランが不明瞭であったため、3×3mのグリッドを設定しベルトを残して検出面を下げた。また、部分的にトレチングを入れ、土層断面の検討を行い、切り合い関係を判断した。そのため、住居址の軸を通る断面図を作成することはできなかつた。また、北辺・東辺は掘削手順の誤りもあり平面プランを描むことができなかつた。

土層断面の検討の結果、363・364住を切る。北に位置する365住も本址と重複すると考えられ、出土遺物から本址が新しい。

カマドは北壁中央のやや西寄りに位置する。構築磧が組まれた状態で検出され、遺存状態は良い。カマド左袖部は扁平な車輪縫を3段積み、その他は長楕円形の礫を用いている。また、奥壁寄りには扁平な石を用いて天井部を構築している。奥壁は搅乱されているが、構築材の残存長で長さ0.95m、幅0.75mである。カマド内の焼上面からは完形の土器器小型壺(第16図49)が伏せた状態で出土している。

住居内遺構はP1、P2があるが、いずれも深さ0.05～0.10mと浅く、柱穴とは考えにくい。カマド脇の付属ビ

ットと考えられる。北東隅は、床面より0.16~0.25m高く、テラス状になっていた可能性が高い。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は11,812gである。カマドから南西部に集中し、中～下層から遺存状態の良い土器片が多量出土した。これらの出土遺物から古代土器編年の7期、9世紀第3四半期に帰属するものと考えられる。また、西端から須恵器杯A（第15図46）が出土している。4～5期に属するもので、混入品と考えられる。

（4）第363号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362住、5土、P2に切られ、364~366住を切る。

カマドは東壁中央に位置する。カマド脇のP3から被熱縁が多量に出土しているため、石組カマドであろう。

住居内遺構は3基のピットが南西隅を除く三間に位置する。P1は深さ0.30m、P3は深さ0.23mであるが、P2は深さ0.05mほどの浅いくぼみである。上述のとおりP3にはカマド構築縁が廃棄されている。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は3,476gである。床面近くの遺物は少なく、カマド周辺に集中する。

（5）第364号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362・363住、4土、P4に切られる。

カマドは東西2ヶ所で確認された。西側のカマドは石組カマドである。西壁の中央や北寄りに位置し、多量の被熱縁が検出され、当初は元位階を保っているものと考えられた。しかし、調査の結果、被熱面より浮いた状態であったため、破棄された痕跡である。0.12×0.11m、深さ0.08mの浅いくぼみで、底面の奥壁側に被熱面を確認した。東側のカマドは、東壁の中央や南寄りに位置する。西カマド同様に、0.75×0.95m、深さ0.10mほど掘りくぼみ、焚口側の底面に被熱面を確認した。また、奥壁に向かって浅い溝のがび、礫が撒えられている。また、右袖部に構築縁が1点残存している。ともに同一面での検出であるが、遺存状況から東壁のカマドが古く、西壁のカマドに作り替えたものと考えられる。

住居内遺構はピットが3基ある。P1・2は位置関係から柱穴の可能性があるが、いずれも0.10~0.17mと深い。P3はカマド付属のピットである。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は3,855gである。西側の新カマド周辺が多い。特筆すべきものでは、南西隅から黒背された黒色土器杯A（第16図71）が出土している。

（6）第365号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362・363住、P10に切られる。

カマドは確認できなかったが、コンクリート搅乱の西側で10~30cm大の礫が集中して検出された。被熱は確認できなかったが、住居廃絶時に廃棄されたものであろう。住居内遺構はP1がある。0.5×0.45m、深さは0.18mである。貼床は確認できない。

山上遺物の総量は2,074gである。コンクリート搅乱の周囲や礫集中に混じって、須恵器甕や土師器甕の大きめの破片が多量山上している。食膳具の出土は少ない。

（7）第366号住居址

東区の中央北寄りに位置し、調査区外の北に続く。363住、P1・2、溝2に切られる。363住のプラン確認のため、調査区北壁にトレーナーを掘削し本址の立ち上がりを確認した。時間的制約から完掘することができなかつたため、住居の全容および出土遺物について不明な点が多い。検出プランであるが、規模は残存4.8×推定4.1m、深さは0.65mで、方形を示すと考えられる。

362住の南壁面に焼土層が広がるため、トレーナーを掘削したところ南側に被熱面を確認した。位置関係から本址のカマドの可能性がある。被熱縁は検出されなかつた。

遺物は調査区北壁トレーナーと焼土確認トレーナーからのみであるが、総量418gである。

(8) 第367号住居址

調査区中央北寄りに位置し、調査区外の北に続く。12・17土に切られる。北半は0.5cmほどの小礫が少量混入するが、カマドがある南半は礫の混入がほとんどない。貼床は確認できないが、南半は暗灰黄砂質土を床面とし、硬化面が確認された。中央部分は浅いくぼみ状になっており、周囲より約0.20m低い。その結果、西と南部分はテラス状に一段高くなっている。また、東壁の北半にもテラスがあり、上面には厚さ約0.10mの焼土層が堆積していた。

カマドは南西隅に位置し、周開から被熱礫の出土はなかった。住居内構造はピットが7基確認された。P1・2・5は深さ0.30~0.35mで柱穴の可能性がある。P3・4・6は中央のくぼみに位置する。また、P6の近くにも焼上の堆積が確認された。

出土遺物の総量は4,594gである。床面直上の遺物はカマドの周囲が多く、土師器壺が多い。

(9) 第368号住居址

東区の西寄り中央に位置し、他の住居址とは輪方向がやや異なる。369件、溝3を切る。

カマドは北東壁の中央に検出された。被熱礫はほとんど検出されず、約0.1mほど浅く掘りくぼめ、焼寄りに被熱面を確認した。住居内構造は確認できず、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は2,232gである。カマドが位置する北東側が多く、佐波理鉢を模倣したと考えられる黒色土器Aの鉢（第18図108）が出土している。

(10) 第369号住居址

東区の西よりの中央で検出された。368住、13・14・15上、溝3に切られ、南半分は旧県営住宅に大きく搅乱されている。南半の搅乱除去後、わずかに残存するプランを検出し、規模は4.9×推定4.1m、深さ0.42mで、平面形は不整形と推測される。

カマドは北壁中央に位置し、被熱礫がわずかに出土しているため石組カマドと推測される。住居内構造はなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は3,650gである。カマド周辺から土師器壺が多く出土しており、北東隅より残りの良い須恵器杯B（第18図123・125）が出土している。

(11) 第370号住居址

東区の北西に位置する。調査区外の北に続くが、規模は3.8×残存2.4m、深さ0.35mで、平面形は隅丸方形と推測される。

カマドは東壁の南隅寄りに位置する。左袖部に被熱礫が残存しており、石組カマドである。住居内構造はなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は3,810gである。覆土からの出土は少なく、カマド周辺から須恵器壺・瓶類（第18図137~139）が多量出土している。

(12) 第371号住居址

東区の南西隅に位置する。大部分を搅乱され、西辺の一部を残すのみである。規模・平面形とともに不明である。また深さも0.2mと遺存状態が良くない。

カマドは西壁に位置し、周囲に焼土・炭化物粒が散る。被熱礫は確認できなかった。住居内構造は不明で、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は1,502gである。カマド周辺から土師器壺と須恵器壺が出土している。

(13) 第372号住居址

西区の中央北に位置する。平安時代検出面の一層下の灰黄色弱粘質土層で検出した。P32に切られ、27土を切る。調査区外北に続くが、規模5.3×残存4.2m、深さ0.55mで、平面形は方形と推測される。

カマドは東壁のやや北寄りに位置する。東壁から離れて被熱面があり、そこから壁外に向かって幅0.30m、残存長1.6mの煙道が良好に残存する。煙道の奥側には10cm大前後の礫を詰めた状態で出土した。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。壁際は中央部に比べ約0.30~0.40m高く、幅0.10~0.55mほどのテラス状となっている。

出土遺物の総量は5,108gで、カマド周辺が多い。

(14) 第373号住居址

西区北西に位置する。P35~38に切られる。調査区外北に続くが、規模は8.8×残存8.0m、深さは0.52mの大型住居である。

明確なカマドは確認できない。東壁中央に焼土・炭化物粒が散る箇所があるが、被熱礫は確認できなかった。

住居内遺構はピットが11基ある。壁寄りに位置するが配置に規則性はみられず、深さも0.10~0.35mと差がある。また、断面からも明確な柱痕は確認できなかった。貼床も確認できない。

出土遺物の総量は22,574gである。覆土中層からも完形に近い遺物が多い。また、床面直上、特に南西部は、炭化物粒を多量混入する弱粘質土層が堆積し、その下から細片の遺物が多量出土した。美濃須衛産の須恵器が多く出土し、特に杯B・盞が多い。また、床面から刀子2点が出土している。

(15) 第374号住居址

拡張区の中央に検出された。北と南を搅乱され、東側は拡張区南北トレーニングにかかるため、西側の一部しか残存していない。また、時間的制約から遺物の取り上げおよびカマド周辺の掘削のみにとどまってしまった。そのため、検山プランからであるが、規模は残存5.2m×残存5.5mで、西壁で深さは0.15mある。平面形は不明である。

カマドは西壁に位置し、周囲に被熱礫が検出されたため石組カマドであろう。住居内遺構は不明である。

遺物は、一部分のみの調査であるため全体を表すものではないが、総量2,022gを得ている。

3 上坑

上坑は東区で20基、西区で9基の合計29基検出した。搅乱されるものも多く、全容を把握できるものは少ない。また、東区の4・9丁、西区の24・27丁は明確なプランやカマドを確認できず、住居址とは判断できなかったものである。遺物が一定量出土しており推定規模からも他の上坑とは異なる。以下、特徴的な土坑について記述する。

(1) 第4号土坑

東区の中央北寄りに位置する。検出面でプランを確認し、グリッドを設定し掘り下げたが明確なプランは確認できなかった。東側は溝2に切られ、隣接する361住も土壟断面観察用のベルトからは本土坑の覆土は確認できず、本遺構を切っている。西に位置する364住を切るものと考えられる。出土遺物の総量894gである。黒色土器A杯や須恵器杯Aが出土している。

(2) 第9号土坑

東区の中央南に位置する。遺構の大部分を搅乱され、西側の立ち上がりしか確認できない。下層覆土にわずかに焼土粒が混入する。遺物は総量1,456gで、西側に集中して出土した。

(3) 第24号土坑

西区の中央南に位置する。土坑としたが、平面および断面でも明確な立ち上がりではなく、唯一西側の立ち上がりのみを確認できた。後述する溝6・7と重複するものと考えられ、平面プランも不明確である。覆土は鉄分が多く混入する灰オリーブ砂質土層で、下層になるにつれて砂の混入が多くなる。出土遺物は総量956gと少ないが、完形の須恵器杯A(第21図233)が出土している。

(4) 第27号土坑

西区の中央北に位置する。372住同様に平安時代検出面の一層下の暗灰黄色弱粘質土で検出した。372住に切られるが、372住の下にわずかに本土坑の覆土が残存している。また、372住の西外側で礫の集中と焼土粒の分布が

確認されたため、住居址である可能性もある。調査区外の北に続くが、5.3m以上×残存2.5mで、深さは0.65m、平面形は不明である。出土遺物は総量2,606gである。十師器鉢・甕（第21図236・237）があり、372住と同時期と考えられる。

4 溝

自然流路を含め溝は8条検出した。溝1は20土・溝3を切る。同じく溝3を切る368住と離を同じくするため、同時期の区画溝のようなものかもしれない。溝2は石積1および西岸の住居址を切る。覆土は堀へ人頭大の礫で構成され、洪水性の自然流路である。溝面の觀察では、擾乱直下まで堆積しているため、平安時代以降長く堆積が続いたようである。南に位置する第8次調査でも洪水性の自然流路が確認されているが、位置と方向から推測すると、同一のものではなさそうである。溝3は5cm大までの礫が十体の砂礫層で、369住、7土を切る。溝5は東区北東隅に位置し、溝2と同じく洪水性の自然流路である。溝4・8も砂礫層が堆積するが、流路というほど明確なものではなく洪水堆積層の痕跡である。溝6は西区の南北方向に流れが、住居址の覆土と同様の暗灰黃～灰オリーブ砂質土で埋没している。底面に一部砂礫層が堆積し、流水痕跡は確認できるが埋土に混じる礫の大きさから考えても洪水のように流れの強いものではない。底面には10～30cm大程度の円錐礫が集中し、被熱したものもみられる。遺物は古墳時代後期の十師器鉢（第21図239・240）、奈良時代の十師器・須恵器が出土している。溝の方向から推定すると、擾乱より南側の21土、溝7を包括すると考えられ、一連の溝の可能性もある。さらに南側の第8次調査の溝1もしくは第12次調査の凹地状地形と同一のものと考えられる。出土した上器はあまり摩滅しておらず、被熱痕跡のある礫群が底面にまとまって出土するなど、第12次調査の凹地状地形との共通点も多い。

5 石積遺構

東区北東隅に位置する。東区調査終了後、北への広がりを確認するために拡張区を設定した。石積1が位置する北東部は擾乱が深く、コーケス灰が地表下約1mまで堆積している。重機で検山面をやや掘り下げた高さで検出したものである。石積1を覆うように暗オリーブ褐色～暗灰黃粘質土層が堆積しており、検山面は奈良・平安時代の面より0.2～0.3m低い。当初は近世以降の暗渠と考えていたが、ほぼ直角に凸があるためトレンチを掘削し石積遺構と確認した。

西側は溝2に切られるが、一部、砂礫層との間に暗オリーブ粘質土層が堆積しており、溝2との時期差があると判断した。溝2は北にいくにつれて本遺構に近づくように流れているため、拡張区の中ほどから北は破壊されているものと推測される。

上述のように擾乱・削平を受けているため上部の構造は不明であるが、上端で東西5.6m以上、南北12.0m以上、下端で東西8.8m以上、南北13.0m以上を測る。石積の基底部からの残存高は南辺で約0.15m、西辺東区部分で約0.80m、拡張区部分で約1.50mである。一部石を抜き取り、断ち割り断面を観察したが、15～20cmの大平板な亜円礫を用いて石を積み上げている。また、石の間にも暗オリーブ褐色粘質土が混入している。

石が積まれる法面は、確かに混じる黄褐色～暗灰黃色砂質土層とその下の暗オリーブ褐色砂質土層で構成されている。後者は地山であるが、前者は盛土の可能性もある。基底面は基盤の砂礫層に直接石を積んで構築している。

南側には幅0.6～1.2m、深さ約0.1mの浅い溝状遺構が石積1に沿うようにあるが、西側は溝2に切られるため周溝のようなものかはわからなかった。また、拡張区の東縁に沿って南北トレントを掘削中に石列1を確認した。調査区外の東に続くものと考えられ全容は不明である。直上まで擾乱されるが、30～40cmの大平板な石が並ぶ。南側には10cm大程度の礫が集中している。石積1に囲まれた範囲内に位置しており、関連も考えられるが性格の特定までには至らなかった。

石積関連遺物は南側の浅い溝状に堆積した砂礫層から出土した十師器（第22図254）と、石積の下層から出土した上師器甕部片がある。いずれも細片であるが古墳時代前期の可能性がある。

第2表 穴穴住居址一覧

No.	地区	平面形態 主軸方位	主軸×直軸×深(m) 床面積(m ²)	カマド形態 位置	新 旧	時期	備考
360 東	方形	(4.1) × 4.1 × 0.45	石組か N-7-E	焼土1 (12.4)		4~6期	東壁にもカマドあり(焼土1)。 360件の屋上に被熱面があるため、別住居のカマドの可能性が高い。
	N-3-E	(16.3)	西壁中央				
361 東	方形か N-3-E	(4.6) × 4.8 × 0.46 (16.3)	石組か 東壁中央	P5、溝2 4土		6~7期	溝2覆土下よりカマド検出。
362 東	長方形か N-80-E	(3.7) × (4.5) × 0.60 (12.5)	石組 北壁寄せ	5土 363住・5土、P2		7期	石組カマドの遺存良好。元形遺物 が数多く出土した。
363 東	方形 N-88-E	4.6 × 3.9 × 0.65 10.9	石組 東壁中央	364~366住 6土、P2		6~7期	
364 東	長方形 N-81-E	4.6 × (3.6) × 0.45 (9.3)	石組 旧:東壁中央 新:西壁中央	362・363住・4土、P4		6~7期	東西2ヶ所にカマドあり。遺存状況 から西カマドを新カマドと判断した。
365 東	方形か N-17-E	5.8 × (3.6) × 0.75 (17.3)	不明	363住・5土、P10		3~5期	調査区外に継ぐ。カマドは未発 見。大半をコンクリート基礎に覆 乱されている。
366 東	方形か N-60-E	(4.8) × (4.4) × 0.65 7.6	焼土面のみ 南壁寄り	363住、P1、溝2		4~6期	トレーナーにより確認。未顧だが、 カマドおよびプランを確認した。
367 西	長方形か N-5-E	(5.7) × 4.7 × 0.58 (20.0)	被熱面のみ 南西隅	12~17土		5期	調査区外に継ぐ。カマド以外に北 東壁・中央にも焼土散布が確認され た。
368 西	方形 N-60-E	3.2 × 3.5 × 0.25 7.6	焼土面のみ 東壁中央	369住・溝3		4期	溝3を切る。床面は砂層である。
369 西	方形 N-16-E	4.9 × (4.1) × 0.42 (12.6)	石組か 北壁中央か	368住・14・15土、 溝3		4期	南半は大きく擾乱される。
370 東	圓角方形 N-79-E	3.4 × (2.4) × 0.35 (6.4)	石組 東壁西寄り			3~4期	調査区外に継ぐ。カマド周辺より 須恵器甕・瓶類が多量出土した。
371 東	不明	不明 × 不明 × 0.2	焼土面のみ 西壁中央か			7世紀後半	大部分を擾乱される。
372 西	方形か N-82-E	5.3 × (4.2) × 0.55 (17.4)	石組 東壁	P31・32 27土		7世紀後半	調査区外に継ぐ。平安時代検出面 の1層下で検出。遺道が良好に遺存 する。
373 西	方形 N-89-E	8.8 × (8.0) × 0.52 (61.8)	不明 東壁中央に 被熱面あり	P34~38		3期	調査区外に継ぐ。大型住居で、多 量の遺物が出土した。美濃須衛座 須恵器が多量出土。
374 批量	不明	不明 × 不明 × 0.15	石組か 西壁			6~7期	弥生区域り下げ中に検出した。ト レンチおよび搅乱により全形は不 明。

計測値のうち、○は残存値、△は推定値である。

主軸方向はカマドの方向として計測した。住居址隅にカマドがある367住と、カマドが検出されなかった365住については長軸を主軸とした。

カマド形態は、ほとんどの住居址で廃棄後の状況を呈していると考えられるが、周囲に被熱跡が出土する場合は石組カマドと推測できる。

遺構の新旧関係はその遺構より新、旧で表示した。

第3表 土坑・ピット一覧

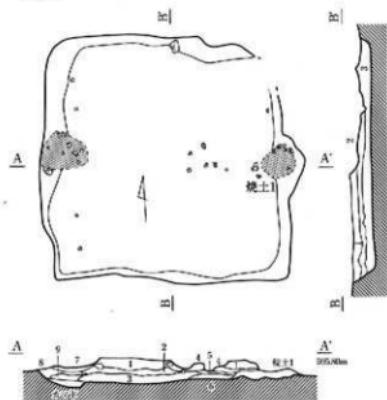
遺構 No.	地区	平面 形態	長軸×短軸×深(m)	切り合い關係		出土遺物	備考
				旧	新		
1土	東	長円形	1.02 × 0.50 × 0.40	石積1			
2土	東	円形か	0.90 × (0.80) × 0.38		溝2		
3土	東	円形か	(0.45) × (0.60) × 0.32		溝2		
4土	東	不明	3.50 × 3.20 × (0.26)	364住	361住	黒A杯A、土師高杯・壺A・B・小型壺、須恵 杯、甕	6~8期。
5土	東	楕円形	0.89 × 0.60 × 0.55	362・363・365住			
6土	東	円形	0.66 × 0.58 × 0.20			土師小型壺	
7土	東	円形	0.89 × 0.80 × 0.22				
8土	東	壺円形か	(0.50) × 0.51 × 0.10			黒A杯、土師壺A、須恵杯・壺	
9土	東	不明	4.52 × 3.45 × (0.24)		溝3	黒A、土師壺B、小亞甕、須恵杯A・B・蓋・ 壺・蓋	5~7期。
10土	東	円形	0.63 × 0.59 × 0.6				
11土	東	円形	0.50 × 0.45 × 0.14			土師甕	
12土	東	円形	0.74 × 0.59 × 0.12	367住			
13土	東	円形?	0.95 × 0.83 × 0.19			土師甕、須恵杯	
14土	東	不明	0.58 × (0.30) × 0.17	369住			
15土	東	円形	0.94 × 0.94 × 0.20	溝3			
16土	東	円形	1.01 × 0.85 × 0.27	溝3		土師甕B	

遺構 No.	地区	平面 形態	長軸×短軸×深(m)	切り合ひ関係		出土遺物	備考
				旧	新		
17土 東	円形	0.70×0.64×0.14	367住				
18土 東	円形	0.80×0.65×0.31					
19土 東	円形	0.58×0.44×0.21					
20土 東	長円形	(2.7)×1.5×0.29		P15・溝1			
21土 西	円形	0.75×0.70×(0.31)	22土				
22土 西	長円形か	1.50×1.35×0.38		21土		土師甕、須恵杯	
23土 西	長円形	1.37×0.76×0.08					
24土 西	不明	3.72×3.44×0.34?				土師甕A、須恵杯A・瓦、焼粘土塊	SC初頭。
25土 西	円形	1.07×1.06×0.51				土師甕	
26土 西	円形	0.56×0.51×0.09					
27土 西	不明	(1.24)×(1.08)×0.58		372住		土師甕・B・鉢、須恵蓋・壺	7C後半。
28土 西	不明	0.96×(0.46)×0.08					
29土 西	不明	(1.00)×(0.35)×0.15					
P1 東	円形	0.40×0.35×0.13	366住				
P2 東	円形	0.51×0.44×0.15	363住			土師甕	
P3 東	楕円形	0.39×0.27×0.11					
P4 東	円形	0.40×0.25×0.07	364住			土師甕	
P5 東	円形	0.25×0.25×0.17	361住				
P6 東	円形						未報。
P7 東	楕円形	0.40×0.30×0.16				土師甕B	
P8 東	円形	0.48×0.42×0.05					
P9 東	円形	0.41×0.30×0.17					
P10 東	楕円形	0.43×0.31×0.10	365住			土師甕B	
P11 東	円形	0.34×0.34×0.13					
P12 東	円形	0.42×0.34×0.19					
P13 東	円形	0.29×0.19×0.16					
P14 東	円形	0.27×0.26×0.08					
P15 東	楕円形	0.36×0.25×0.25	20土				
P16 東	円形	0.44×0.39×0.14					
P17 東	楕円形	0.41×0.33×0.18					
P18 西	円形	0.42×0.39×0.23					
P19 西	円形	0.23×0.20×0.19					
P20 西	円形	0.24×0.21×0.21					
P21 西	円形	0.21×(0.15)×0.23					
P22 西	円形	0.26×0.25×0.34					
P23 西	円形	0.25×0.18×0.20					
P24 西	円形	0.45×0.40×0.28					
P25 西	円形	0.47×0.42×0.18					
P26 西	楕円形	0.48×0.47×0.07					
P27 西	円形	0.36×0.35×0.07					
P28 西	不明						未報。
P29 西	楕円形	0.52×0.44×0.09					
P30 西	円形	0.31×0.30×0.25					
P31 西	円形	0.30×0.28×0.40	372住				
P32 西	円形	0.30×0.24×0.42	372住				
P34 西	円形	0.43×0.42×0.13	373住				
P35 西	円形	0.33×0.30×0.69	373住				
P36 西	円形	0.34×0.34×0.29	373住				
P37 西	円形	0.30×0.30×0.50	373住			土師甕	
P38 西	円形	0.50×0.45×0.27	373住				
P39 西	円形	0.30×0.23×0.40					

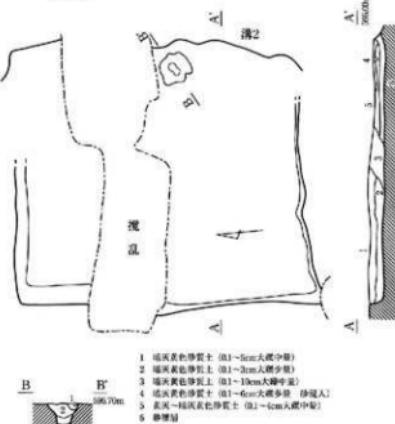
第4表 溝一覧

遺構 No.	地区	最大幅×深(m)	切り合ひ関係		出土遺物	備考
			旧	新		
溝1 東		0.55×0.20	20土、溝3		須恵甕	368住と軸が同じ。
溝2 東		9.3×1.65以上	361・366住、 2~4土、石積1		土師甕B・C	自然流路。
溝3 東		6.9×0.8以上	369住、9土	368住、15・16 土、溝1	土師高杯	自然流路。
溝5 東		1.35以上×不明				自然流路。
溝6 西		4.25×0.67			土師器杯・楕・甕、須恵杯A・B・蓋・高杯・甕・蓋	7~8C代。
溝7 西		不明×0.38		24土、 P24・25	土師甕・須恵鉢・甕	溝6と同一造構か。
溝8 西		0.65×0.03			甕A、土師甕・甕B、須恵杯A・甕・鉢・蓋	自然流路痕跡。

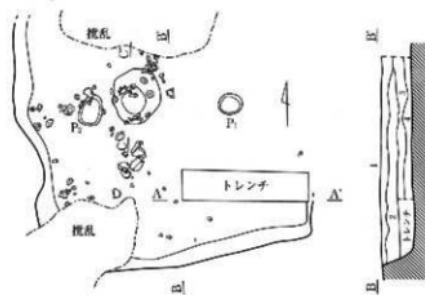
360住



361住



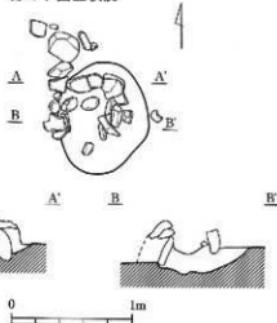
362住



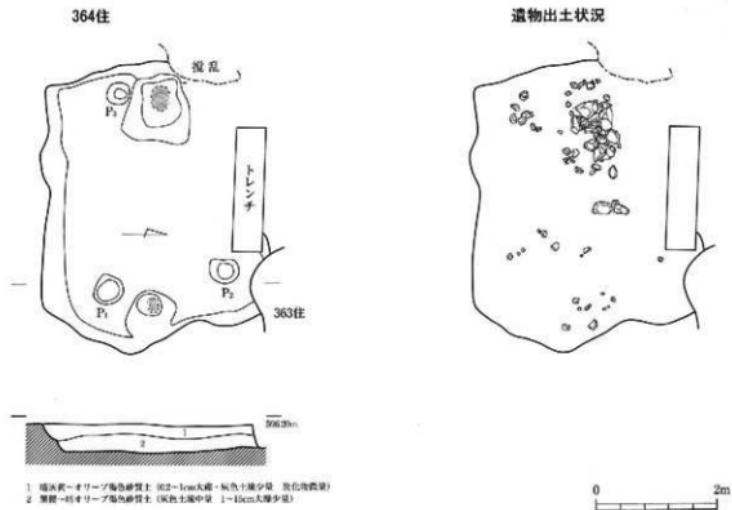
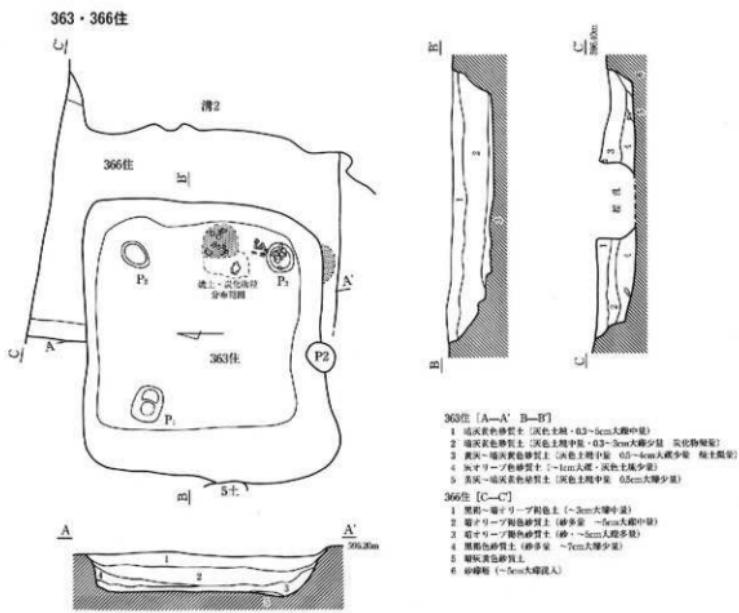
カマド出土状況



カマド出土状況

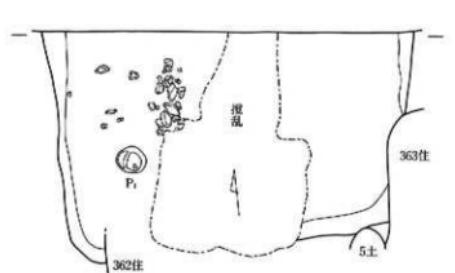


第7図 遺構(1)



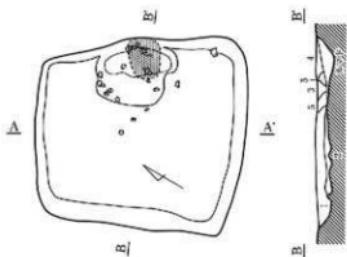
第8図 遺構 (2)

365住



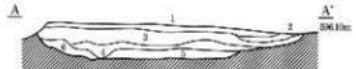
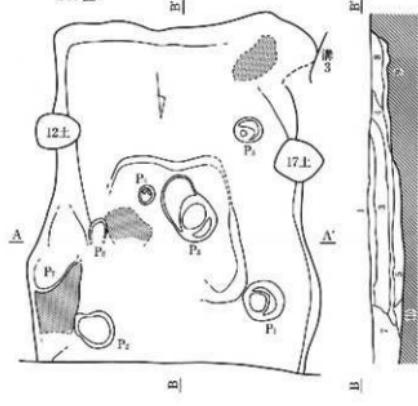
- 1 断続泉～黒褐色砂質土 (0.5～3cm人面少見 黄色土塊少見 塵化物、鉢分骨混)
- 2 黄灰～黒リープ色砂質土 (0.5～3cm人面中見 黄色土塊、鉢分骨)
- 3 黑褐色砂質土 (薄層)
- 4 黑褐色砂質土 (古材付)
- 5 黄褐色土 (鉢分、人面少見 ～1cm人面少見)
- 6 黑褐色砂質土 (古材付) (古材土塊少見 1～4cm大塊少見)
- 7 黄褐色土 (鉢分少見)

368住



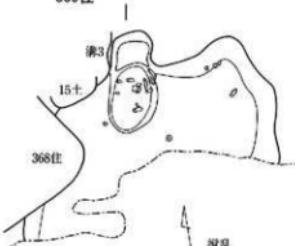
- 1 江海色砂質土 (～3cm人面多見)
- 2 黒褐色 (黒リープ色砂質土混入)
- 3 黑褐色砂質土 (～2cm大塊多見)
- 4 黑褐色砂質土 (～3cm大塊多見)
- 5 黄褐色砂質土 (鉢分少見)

367住



- 1 黒リープ色～黒リープ色砂質土 (～4cm大塊少見 2～4cm大塊少見)
- 2 黑褐色砂質土 (～1cm人面少見 黄色土塊少見)
- 3 黑褐色砂質土 (～3cm人面少見 黄色土塊少見)
- 4 黑褐色土 (鉢分、灰白色土塊少見 ～3cm大塊少見)
- 5 黄褐色土 (鉢分少見) (～3cm人面、灰土、炭化物多見)
- 6 黑褐色砂質土 (～3cm大塊少見 鉢少見)
- 7 黑褐色砂質土 (～3cm大塊多見)
- 8 黑褐色砂質土
- 9 黄褐色砂質土 (鉢多見 ～3cm大塊少見)
- 10 断続泉～黒リープ色砂質土 (鉢多見 ～3cm大塊少見)

369住



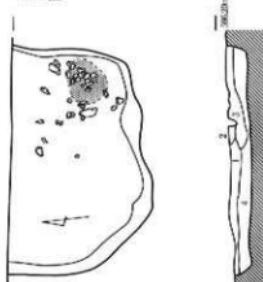
- 1 黒灰青色砂質土 (0.1～5cm大塊少見)
- 2 黄褐色～黒褐色砂質土 (0.5～10cm大塊少見 黄色土塊多見)
- 3 黑褐色砂質土 (灰土中見)
- 4 黒リープ色砂質土 (～3cm大塊多見 鉢少見)
- 5 黑褐色砂質土 (鉢分少見) (炭化物多見 灰色土)
- 6 黑褐色～黒リープ色砂質土 (沙多見 鉢少見)

374住



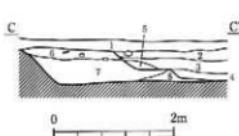
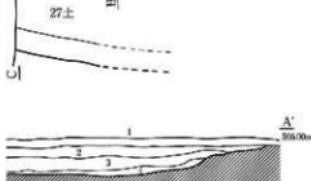
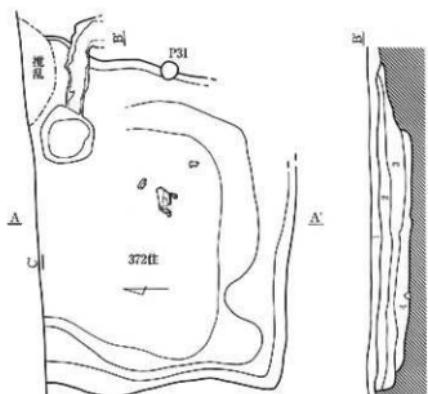
第9図 遺構 (3)

370住



- 1 線ナーベル色砂質土 (～3cm大層中量・斑点少見)
- 2 黄灰～褐色砂質土 (斑分・斑点多見)
- 3 黄灰黄褐色砂質土 (斑分多見・1cm大層少見)
- 4 黑褐色砂質土 (少・斑分・斑点少見多見)

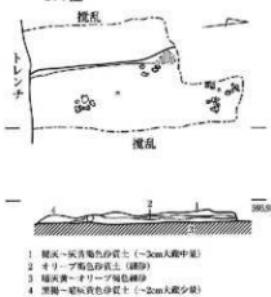
372住・27土



- 372住
- 1 黑褐色
 - 2 黄灰～褐色砂質土上 (斑分中量1～3cm大層散在 斑点少見)
 - 3 黄灰褐色砂質土 (3cm大層・斑分・斑点少見)
 - 4 黑褐色砂質土 (3～4cm大層中量 黑色土塊少見)
 - 5 黑褐色砂質土上 (1cm大層少見)

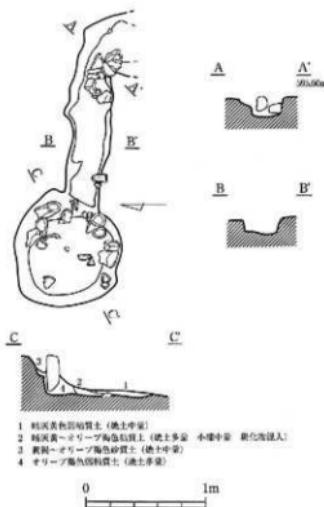
- 27土
- 6 黑褐色砂質土上 (1～5cm大層・斑分少見 黑色土塊少見)
 - 7 黄灰～褐色砂質土上 (1～5cm大層多見 斑分・斑点少見)
 - 8 黑褐色砂質土 (1cm大層少見)

371住



- 1 離灰～灰青褐色砂質土 (～3cm大層中量)
- 2 オリーブ褐色砂質土 (斑分)
- 3 離灰黄～オリーブ褐色砂質土
- 4 黑褐色砂質土 (少・斑分・斑点少見多見)

カマド出土状況

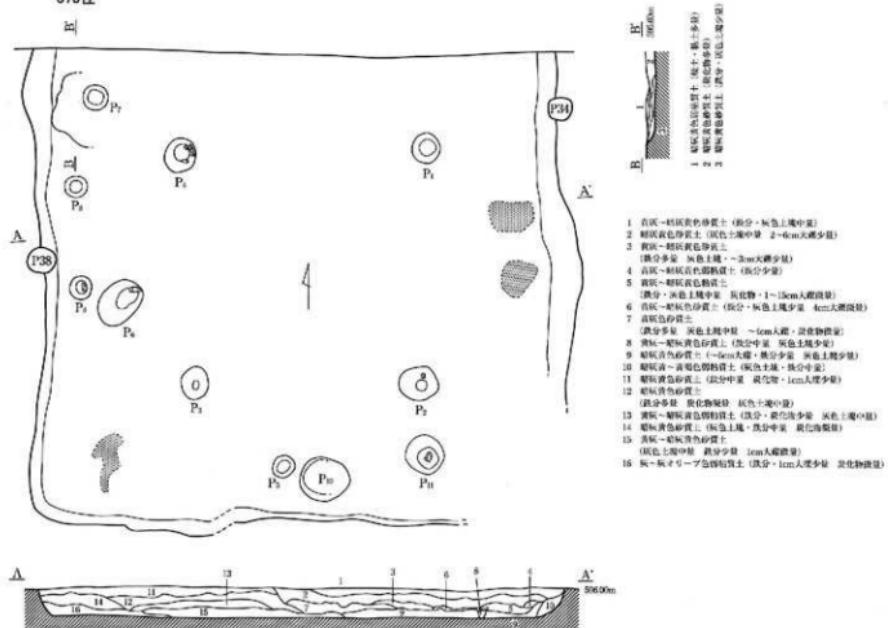


- 1 細灰黃褐色砂質土 (斑点少見)
- 2 離灰～オリーブ褐色砂質土上 (斑上多見 小塊中量 塗化斑点入)
- 3 黑褐色砂質土 (斑点少見)
- 4 オリーブ褐色砂質土 (斑点多見)

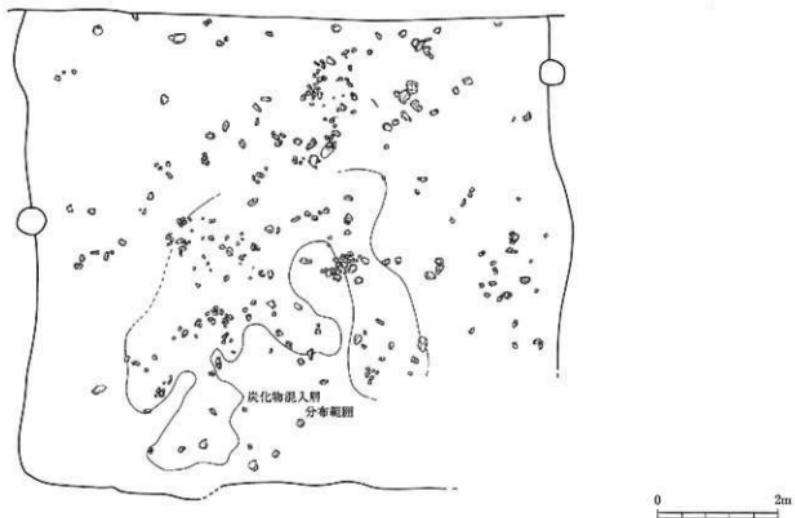
27土遺物出土状況



第10図 遺構 (4)

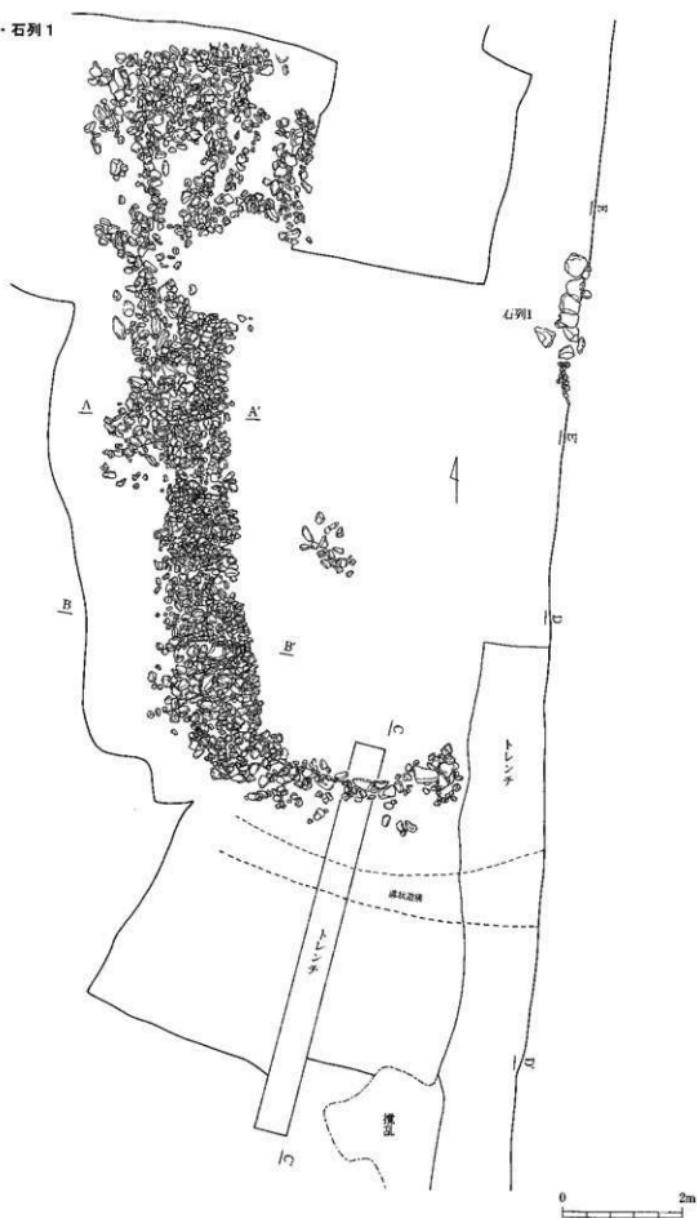


遺物出土狀況



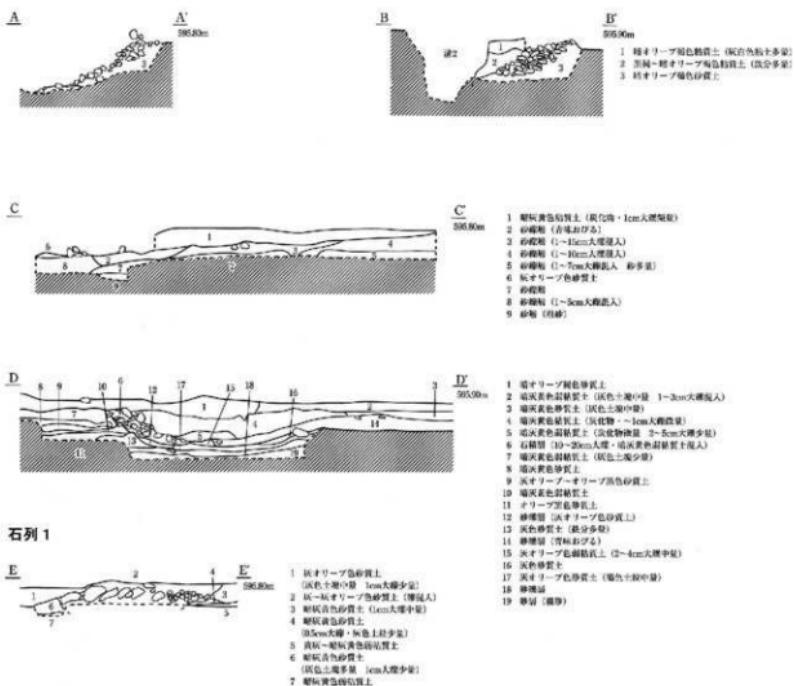
第11図 速構(5)

石積1・石列1

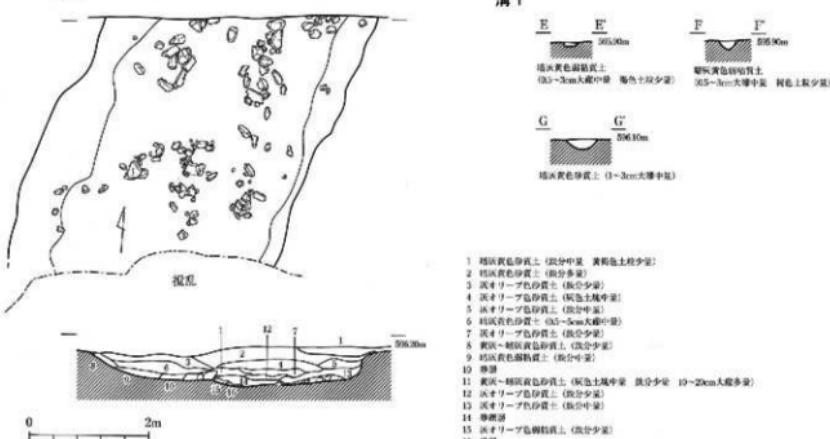


第12図 遺構(6)

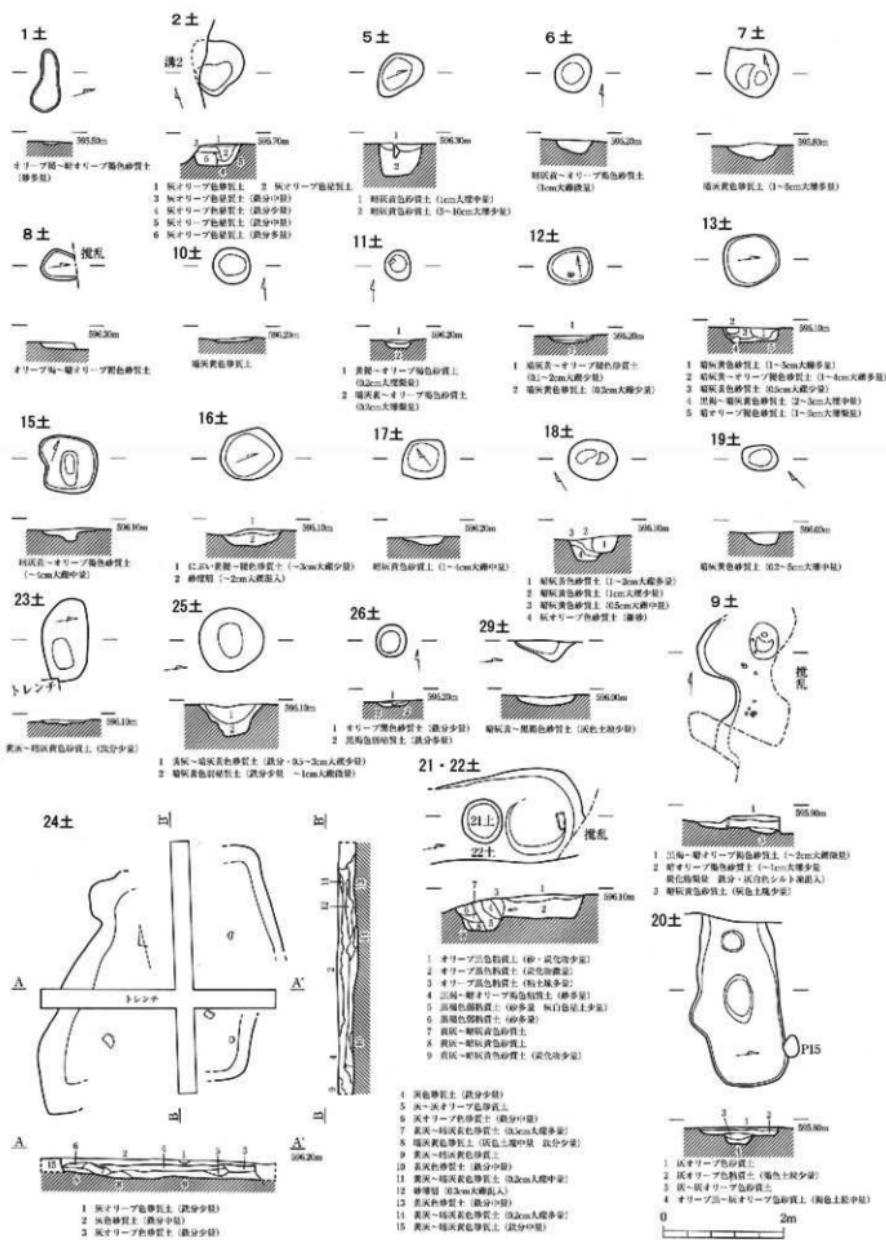
石積 1



溝 6



第13図 遺構(7)



第14図 遺構(8)

第3節 遺物

1 土器

(1) 概要

土器は遺構内、検山面等から出土があり、明らかに近代の搅乱に伴う陶磁器類を除き全点を回収した。総量で 85,691 g となる。

土器の整理は、洗浄の後、取り上げた単位毎に遺構順になるように固有の番号を振り、上段に遺跡・調査名である「出ガワ南 15」を、下段に固有番号と帰属遺構等を注記した。接合は、まず帰属遺構内で、次いで周辺遺構、検出面等で、出土地点を跨いだ接合がないかを検討しながら行った。この段階で、遠距離にある遺構間での接合について見落とされている可能性はある。実測遺物の選別は、残存度が良いものを中心としたが、壺類など大型の器種については大破片であっても図化不能で選別できなかったものも少くない。また、この段階で遺構単位の土器群の特徴を示そうという選別傾向が生じている可能性は当然ある。実測は従来の考古学的手法によって、基本的に側面図に断面図を組み合わせる作図法で行い、底面図が必要と判断したものについてはこれを付した。最終的に本報告書へは 262 点を図化提示できた。実測図の断面が白抜きは土師器と黒色土器、黒塗りは須恵器と軟質須恵器を示している。軟質須恵器は土器番号の脇に N の字を付した。

出土土器の記述は、個別の器種・器形の属性を探ることと、遺構等出土の土器群の時期・性格を把握することの 2 点に重点を置いていた。出土土器群全体を掌握し客観化する作業は困難なものであり、様々な方法が試みられているが、今回はあくまでも調査地や遺跡の歴史的位置付けや評価に即応できることを主眼とした。本文中の番号は第 15~22 図の土器実測図の番号に一致する。「壺形上器」等の名称の「形上器」は省略した。

なお、器種・器形の分類と名称及び土器群の年代観は、古墳時代後期の杯類については文献 1、奈良・平安時代の土器全般については文献 2 に準じた。

(2) 種別、器種・器形

調査全体で出土した種別は土師器、黒色上器、須恵器、軟質須恵器の 4 種がある。陶磁器類の出土はなかった。時期的には、すべてが古墳時代と奈良時代、平安時代前期に属する。

ア 古墳時代の土器

主に古墳時代後期の土師器と須恵器が出土している。土師器の中には内面または内外面黒色処理が行われているものがあるが、この時期には黒色処理技法が特定の器種に必ずしもすべて行われている訳ではないとの理解から、あえて黒色土器の説を避けた。

(ア) 土師器

杯 (142~147・239・240)

基本的に丸底で、口縁部に強いヨコナデが施された後、内面または内外面に横のミガキ、体部下半帯に手持ヶズリが行われるものである。文献 1 による古墳時代後期の土師器杯は杯 A から杯 S までの 19 器形に分類されているが、今回調査も同一遺跡内の別地点であるためこの分類を従う。すると杯 A3 : 144、杯 B3 : 240、杯 E : 142、杯 Jc : 239、杯 M : 147、杯 P : 143・146、杯 O : 145 となる。いずれも丸底または丸底気味を呈すので底径は計測し得ない。145~147・240 は内面に、また 239 は内外面に黒色処理が行われている。

鉢 (148・151・236)

定型的な鉢と呼ぶべき器種ではなく、他の器種・器形に該当しないものをまとめた感が強い。148 は杯 J を大型化した形態で、杯 J と同機能と考えるが、寸法によって鉢に分類した。151 は小型の甕に似るが、内外面にミガキがあり、内面には黒色処理が行われているのでここに含めた。236 も同様に小型の甕に似るが、頸部にくびれがなく、内外面にミガキがある。

甕 (140・141・150・237)

文献 2 の甕 A に相当する、古墳時代後期に伝統的な長胴形の甕である。口縁部を強くヨコナデされ、成形・調整とともに雑でナデや工具ナデが多用されている。底部は厚く、底面に木葉压痕を残す。237 のような中型品には底部を丸底気味に仕上げるものもある。

盃 (152~154)

丸く張る胴部に「く」の字の口縁部がつき、胴部にミガキが行われるものである。古墳時代に特徴的な器種で、奈良時代以降はわずかに胴張り甕として古い時期に残るのみである。

その他の器種 (18・226・238・254)

古墳時代後期に属さないものをまとめた。18 は球形胴で「く」の字に外反する口縁を持つ甕と推定する。古墳時代中期に含めたい。226 は脚接合部で、弥生時代または古墳時代前期の台付甕の一部と考える。238 は4段成形の高杯の脚柱部で、内面上半に絞り痕、下半に横のケズリがあり、外面は縦のミガキがなされる。古墳時代中期に属する。254 は内清気珠に開く口縁部で、おそらく増かヒサゴ甕の一部になるのではないかと考えている。口縁端部の内側に面が作られているのが特徴といえよう。古墳時代前期に遡る可能性を認めた。

(イ) 犀鹿器

杯身 (160)

蓋杯の杯身が1点図化できたが、口縁の立ち上がり部を欠き、全形は不明である。蓋受け部の最大径は 11.4 cm を測る。

杯蓋 (149・158・159・235)

蓋杯の杯蓋は肩部に棱を持つ 158・159 と、天井部からなだらかに端部に至る 149・235 の2形態がある。一般に棱を持つ形態の方が古式と認識されているが、本例はいずれも古墳時代後期の中で収まるものと考える。159 には口縁端部内側に沈線状の窪みが一周しており、かつて面取りされていた形状の痕跡を残している。

高杯 (246)

高杯脚端部と思われる破片が1点ある。ロクロナデの単純な端部となっており、面取り等がないので高杯ではない可能性もある。

甕 (155)

数種類の胴部破片が出土しているが、口縁部から胴部までまとまった形で図化できたのは 155 の中型の甕 1 点のみである。口縁端部の肥厚部に沈線が巡らされ、胴部外には平行線タタキ、内面には全面的に同心円紋当て具痕が明瞭に残る。

イ 奈良・平安時代の土器

上師器と黒色土器の関係は、特殊なものを除き、小型の食膳具を黒色土器、炊飯具を土師器で作り分けている。須恵器には食膳具と貯蔵具がある。軟質須恵器は須恵器に比べて胎土が粗く、一応、還元炎焼成だが軟質な上器で杯の存在のみが確認されている。

(ア) ト鉢器

杯 (156)

1 点のみ、畿内系の暗文杯が確認されている。橙色の特徴的な胎土を有し、体部に斜放射の暗文が付けられている。底面内部には円形螺旋の暗文が施されていた形跡が窺える。口径に対して器高が低く、畿内の編年では新しい方に位置づけられている。この器種は本市域では8世紀代にわずかに類例が認められるのみである。

椀 (241・242)

本例はいずれも破片資料で全形を知りえないが、黒色上器 A の杯 A に近い形態を呈すと推定する。胎土が白色微細で焼成があまい。

盤 (38)

大型の器種である盤への口縁部破片が1点のみ岡化できている。盤Aが盛行するのは9世紀末以降であるが、本例のような古い時期には出土例が少なく、初期の消長や型式変化については未だ不明な点が多い。

小型壺

小型壺は多数出土しているが、ロクロナデが行われる小型壺Dと、ロクロナデが行われずハケメを有する小型壺Bが認められる。小型壺Dは胴部外面全面にカキメが施され、底面には回転糸切痕が残る。中にはハケメをかけた後にカキメを施した折衷的な技法が認められるもの(202)もある。小型壺Bは胴部外面に継のハケメを持つのが特徴とするが、胴下部は横のハケメの場合もある。小型壺Dは土師器壺Bの出現に前後して登場することが知られており、先行する小型壺Bとの間の型式的断絶をどのように捉えるか、今後の課題となろう。

甕

古墳時代後期から伝統的な長胴形の甕Aとハケメを多用する長胴形の甕Bがあり、甕Bが圧倒的に多い。甕Bは松本盆地南部と天竜川水系に主として分布する土師器甕である。この他に東信型の甕である甕C(いわゆる武藏甕: 16・257)と北信型の甕(136)がわずかに出土している。

甕Bの基本形は、胴部外面に継のハケメ、内面に綫長のユビナデ痕がのこり、口縁部はロクロ調整されて内面にカキメが施されている。しかしながら、今回報告の甕Bの中には口縁部内面がカキメではなく横のハケメのものが多数見られ、これらは胴部内面にもハケメやT具ナデを有するものが多い。一方、胴部外面上半のハケメの上にロクロナデの痕跡を留めるものもあり(105・135)、これには口縁内面にハケメやカキメが行われていない。文献2に紹介すればロクロナデの行われるものは甕Dと分類されているが、甕Dは外面のハケメが顕著ではない。したがって、本例は甕Bと甕Dの折衷型と理解したい。ここでは便宜的に口縁内面がカキメのものを甕B1、ハケメのものを甕B2、さらに胴部内面に綫長のユビナデ痕を持つものにa、ハケメや工具ナデのものにbを付し、甕Dとの折衷型は甕B3と分類しておく。おそらく大きな流れは甕B2bから甕B1aへと型式変化をとげていったものと考える。

甕Cは東信地方で盛行する器形で、8世紀後半から9世紀代にかけて本山城でも散見される。小型甕Cとセットになっており、その型式変化は文献2や東信地方の報告に詳しく触れられているのでここでは省く。

北信型の甕は文献2では分類にないが、8世紀後半から10世紀代に北信地方で土師器甕の主体をなし、9世紀後半以降には同じ千曲川水系の東信地方にも進出する。その反面、北安曇郡以南の中南信地方では奈良・平安時代を通して皆無に近い。本出土例は非常に珍しいものと言える。胴部が砲弾型を呈し、内面全面にカキメを有するのが大きな特徴である。胴部外面はT具によるケズリに近い継の調整痕で溝たされ、わずかにタタキの痕跡が認められる。

鍋 (83)

珍しい器種で1点が出土している。甕B1aの口径を広げ器高を下げた現代の描鉢型形態で、胴部外面のハケメ、口縁部内面のカキメの存在なども一致し、製作技法は甕B1aと同様であったと考える。北信地方でも北信型の甕の製作技法と同様な鍋の存在が確認されており、数量的には少ないと、地域をまたいで一定の用途が付与されていた器種と考えたい。

(イ) 黒色土器

杯

食膳具の主体を占める器種のひとつで多数の出土がある。器形は定型化した杯Aのみで、寸法によって杯A Iと杯A IIの2種があり、杯A IIは口径13cm、器高4cm前後、杯A Iは口径15~16cm、器高5~6cmを測る。いずれも体部外面は丁寧なロクロナデ、内面は細かい放射状のミガキが行われ、底面には回転糸切痕が残る。古い形態は内面のミガキが放射状ではなく細かく緻密で、底面の糸切痕を丁寧にケズリ落としている。次項で述べる黒色土

器Aの特殊な鉢（108）のようなものが祖形で、金属器の鉢か三彩・二彩の杯形のものを模倣して出現すると考える。出現直後からI、IIの寸法の分化がある。

鉢（35・108）

杯A Iをさらに大型化したもので、口径は20cmを超える。片口が付くものもあるが、今回の調査では片口付は確認できなかった。この他に特殊なものとして108を鉢に加えた。基本的には杯A Iと同形態であるが、口縁外側に複雑な沈線が一周し、佐波理鉢を模倣、あるいは佐波理鉢を模倣した須恵器を再模倣したものと捉えて鉢とした。ロクロナデで調整されるが、体部下端から底面一帯に丁寧な手持ケズリを行っている。杯Aの祖形にあたると考えている。

碗（217）

わずかだが出土がある。1点を図化提示でき、それ以外にも2個体ほどみられた。形態的には杯Aに高台が付されたもので、ロクロナデの後、体部内面に放射状に細かいミガキをかけ、焼成時に黒色処理を行っている。出現の契機は線釉陶器、灰釉陶器、あるいは輸入磁器の碗の模倣であろう。黒色土器Aの碗は9世紀末以降に盛行するため、土器群の伴生関係に問題がなければ、本例は古朴にあたるものとなる。

皿（36・37）

皿Bが少数出土している。2点を図化提示できた。ロクロナデの扁平な体部に高台を付したもので、内面は細かいミガキの後、黒色処理が行われ、底面には回転糸切痕が残る。出現の契機は、輸入磁器またはそれを模した線釉陶器の更なる模倣という見解と、木製の漆皿を模したものとの見方もある。9世紀の後半に特徴的な器種である。

（ウ）須恵器

杯

高台を持たない杯Aと高台を有する杯Bの2者が認められ、いずれも多数が出土している。

杯Aはほとんどが平底だが、丸底気味のものが数点ある（233・234）。丸底気味の方が古い形態であろう。平底の中にも、底面がヘラ切・ヘラケズリのものと回転糸切のものがあり、時期差に起因すると考えられる。ここでは丸底気味のものを杯A1、平底で底面がヘラ切・ヘラケズリのものを杯A2、底面が糸切のものを杯A3と仮称する。概ね杯A1は7世紀末から8世紀第1四半期、杯A2は8世紀第2～3四半期、杯A3は8世紀第3四半期以降と把握している。

杯Bは口径に比して器高の低いものと高いものの2形態がある。底面は回転ケズリが行われるが、その中央部に回転糸切痕を残して、切り離しが糸によることが判るものと、全而に回転ケズリが行われ、切り離し方法がわざかに判別できないものがあり、後者は底部の下部への膨らみ具合によってヘラによる切り離しか糸切かを推定している。杯Bの分類としては、ヘラによる切り離しと推定されるものを杯B1、糸切と推定されるものを杯B2、底面中央部に糸切痕をケズリ残すものを杯B3としておく。この3種の底面状態の違いも、時期差に起因すると考えられる。すなわち杯Aと同様に、杯B2の糸切が導入されるのは8世紀第3四半期以降で、さらに杯B3の底面中央部に糸切痕がケズリ残されるものは8世紀第4四半期以降と考える。

皿（219）

須恵器の中では珍しい器種で、黒色上器の皿と同じ形態を呈するが、内面にミガキはない。本調査では1点のみ認められた。底部一帯を欠くが、他遺跡の例から見ると付け高台を伴っているものと糸切底のままの2者があり、本例の全形を推定するのはむずかしい。

蓋

端部が短く屈曲し天井部に扁平な宝珠つまみを有する蓋Bがほとんどだが、例外的に天井部に回転糸切痕をそのまま残す190や、端部の屈曲が長い101などがある。いずれの蓋Bも反転して開口部を上にした状態で成形され、ロクロナデによって端部の屈曲も形成される。ヘラないしは糸によって切り離されて伏せられ、最後の工程で天井部

に回転ケズリが加えられて宝珠つまみが付せされる。切り離し方法は伴出する須恵器杯Aや杯Bに準じて時期差による変化があると考えるが、190のような特殊な例を除いて切り離し痕は全くケズリ消されているので確証はない。190は系切部を底部に据えて皿形の器種とも考えたが、端部の屈曲が蓋Bに酷似するため蓋と分類した。101については上下反転して高台が付される盤または高盤になる可能性も考えたが、図上では高台径が小さくなりすぎるため蓋と分類した。口径の大きさなどから、通常の杯Bではなく金属器模倣の鉢や皿などと組み合わせるものと考える。

長頭壺

口縁端部がわざかに立ち上がり、肩部の肩が丸い長頸壺Aと、口縁端部がそのまま外反し、肩部に棱を有する長頸壺Bがある。今回では破片資料がわざかに出土しているのみである。時期的には長頸壺Bの登場が8世紀前半台と先行し、長頸壺Aは9世紀後半から10世紀代に主流となる。図示した19と56はいずれも長頸壺Aになると想定している。20は底部破片なのでA・Bの判別がつかない。

壺

明らかに短頸壺等の器種が弁別できないものを「壺」としてまとめてある。

甕

須恵器の大型貯蔵具の破片は多いが、その大きさ故に図化できたものは多くない。長めの口縁部が外反しながら大きく聞く中型・大型の壺A、中型で壺Aに比べて口縁部が短く聞く壺C、中型で肩部が張り、そこから頸部がわずかにくびれて短い口縁部が聞く平底の壺Eの3器形が認められる。また壺Aの中型品には凸蒂付四耳壺である壺Dが含まれている可能性もあるが、耳部の出土はない。いずれも肩部にタタキ、口縁部にロクロナデがおこなわれる。

不明器種(58・59)

相似形の2点が出土している。同一個体の可能性もある。大型の壺Aの口縁部状を呈して外開するが、端部近くで大きく畳曲して聞く。端部が面取り状を呈すことから大型の台状の形態になると想定して脚部として図化したが、自然軸の飛び方からみると上下が逆転して口縁部である可能性も高い。口縁部とした場合も、どのような器種になるのかまったくわからない。

(c) 軟質須恵器

杯(11・77)

わずかな存在が確認されており、2点を図化した。食器具の主体が黒色土器Aの杯Aと須恵器杯Aの底面に回転系切痕を有す段階のものに内められる土器群の中に混じて存在する。前述したとおり、還心状態で焼成されて暗灰色を呈しているが焼きはあまり、胎土は粗雑で脆い。

(3) 土器群

ア 東海系の須恵器

須恵器の中には灰白色硬質な胎土を持ち、明らかに他と異なる土質な焼成状態を示す一群がある。主な器種器形は杯A、杯B、蓋Bであるが壺A、壺Eにも類例がある。これらは在地の須恵器産業ではなく東海地方西部の窯で焼成され、当地に搬入されたものと考える。特に注目されるのは美濃須衛窯製品であり、文献2でも当地域に多量に流入したことが触れられている。当該窯産と推定できる個体は、杯Aでは164・178、杯Bでは180~186・188・189、蓋Bでは191~193などであり、このほか図示できなかったが壺Eなどにも含まれていると考える。373号件居址出土品が大半を占めており、同住居址出土の土器群の時期的な問題と、器種器形の組み合わせ上の特性および同住居址そのものの性格が原因と考える。

イ 遺構出土の土器群

前述のように土器群をより客観的に把握し記述・提示しようという作業は、現場でも整理レベルでも時間と経費

を要するものであり、また細分に過ぎると最終目的であるべき歴史叙述に用をなさなくなる恐れもある。したがって、ここではまとまった出土量があり、図化提示できた個体数が多い遺構出土土器群について、図化提示できた土器を中心にお構ごとに概観する手段を探りたい。

なお、遺構間接合のあった個体が 10 点ほど認められるが、最終的に残存度の多い方の遺構に帰属させた。接合の原則は遺構間の切り合いによる混入、上而の搅乱等による混入がほとんどと考えるが、正直なところ十分な検討ができなかつたものが多い。観察表の注記の欄で確認をいただきたい。

(ア) 第 361 号住居址出土土器群

15 点を図化している。食膳具が黒色土器 A の杯 A と須恵器の杯 A3 で構成され、わずかに軟質須恵器の杯 A が混じる。土師器甕は甕 B1 が主体で甕 C が伴っている。黒色土器 A・杯 A と須恵器杯 A3 の比率がほぼ半々で、軟質須恵器が伴いながら黒色土器 A の椀がない点などから、本土器群は文献 2 に従えば 6~7 期、9 世紀第 2・3 四半期に相当しよう。

(イ) 第 362 号住居址出土土器群

39 点を図化している。食膳具が黒色土器 A の杯 A と須恵器の杯 A3 で構成され、土師器甕は甕 B1a が主体となっている。黒色土器 A・杯 A と須恵器杯 A3 の比率がほぼ半々で、これに黒色土器 A の椀と皿 B と土師器の小型甕 D が伴う構成は 7 期、9 世紀第 3 四半期に相当しよう。

(ウ) 第 363 号住居址出土土器群

11 点を図化している。食膳具が須恵器の杯 A2・杯 A3 と杯 B および黒色土器 A の杯 A で構成されている。土師器甕は甕 B1a で小型甕 D が伴う。須恵器の甕 C がみられる。本土器群は時期的に 2 分され、占相は須恵器杯 A2・B、須恵器蓋、新相が黒色土器 A と土師器甕 B1a、小型甕 D である。文献 2 に従えば古層は 5~6 期、9 世紀前半期、新相は 6~7 期、9 世紀第 2・3 四半期に相当する。本址に直接帰属する時期は新相をもってあてたい。

(エ) 第 364 号住居址出土土器群

17 点を図化している。食膳具が黒色土器 A の杯 A と須恵器の杯 A3 で構成され、わずかに軟質須恵器の杯 A が混じる。土師器甕は甕 B1 が主体で鉢、小型甕 D が伴っている。黒色土器 A・杯 A と須恵器杯 A3 の比率がほぼ半々で、軟質須恵器が伴いながら黒色土器 A の椀がない点などから、本土器群は 361 号住居址群と同様に 6~7 期、9 世紀第 2・3 四半期に相当しよう。

(オ) 第 367 号住居址出土土器群

13 点を図化している。食膳具は須恵器の杯 A3 が主体で、わずかに黒色土器 A の杯 A が混じる。煮炊具は土師器甕 B だが 103 のような異質なものや甕 B3 を含んでいる。須恵器杯 B が認められないが、5 期に前後する時期の土器群と捉え、9 世紀第 1 四半期に置きたい。

(カ) 第 368 号住居址出土土器群

12 点を図化している。食膳具は須恵器の杯 B3 と蓋 B で構成され、杯 A か B の判別がつかないものが 3 点あるが、杯 A とすれば腰の張る比較的古い形態を呈すものと考えられる。また須恵器碗 A が 1 点認められた。黒色土器 A は佐波理鍊を模倣したと推定する特殊な鉢 (108) が 1 点のみである。煮炊具は土師器の甕 B2 と小型甕 B である。4 期に前後する時期の土器群と捉え、8 世紀後半の時期を考えたい。

(キ) 第 369 号住居址出土土器群

11 点を図化している。食膳具は須恵器の杯 A、杯 B2・B3、蓋 B で構成され、煮炊具は土師器の甕 B である。4 期を前後する時期の土器群と捉え、8 世紀後半の時期を考えるが、土師器甕 A の存在や須恵器蓋 B の形態から、第 368 号住居址出土土器群に先行すると見たい。

(ク) 第 370 号住居址出土土器群

9 点を図化している。食膳具は須恵器の杯 A2、蓋 B と黒色土器 A の杯 A であるが、須恵器蓋 B の存在から同杯

Bも伴っていたと考えてよいだろう。煮炊具は上師器の壺B3と北信型の壺である。北信型の壺の存在は特異な事例と抜けても壺B3の時期的評価がむずかしい。1点のみの黒色土器Aの杯Aが底面に糸切痕を残すものである点に疑義が生じるが、須恵器杯A2や土師器壺B3を根拠にして、3~4期の土器群と捉え、8世紀中葉~後半の時期を想定したい。

(ケ) 第372号住居址出土土器群

14点を図化している。全体的に古墳時代後期の資料で、上師器の杯、鉢、壺、壺、須恵器の杯蓋、壺が出土している。土師器杯類の形態から7世紀代、須恵器の杯蓋から7世紀後半の時期が導けると考える。

(コ) 第373号住居址出土土器群

60点を図化している。食器具は須恵器の杯A2とB1が圧倒的多数を占め、蓋Bも伴っている。珍しいものとして天井部に糸切痕を残す須恵器の蓋(190)と上師器の叢内系暗紋杯(156)がある。煮炊具は上師器の壺Aと壺B2で、壺Gに類似する破片も伴っている。また、小型壺Dがわずかに作る。貯蔵具は須恵器の壺Cと壺Eがみられる。上師器や黑色土器の定型的な杯類を欠き、須恵器の杯類に糸切技法がほとんどない点から3期の良好な資料であり、8世紀中葉に位置づけられる。なお158~160の須恵器蓋杯の杯蓋と杯身は7世紀代以前のもので、混入品と判断した。

(サ) 第24号土坑出土土器群

須恵器杯Aを3点図化しているが、いずれも杯A1で8世紀初頭に位置づけられる一群であろう。

(シ) 第27号土坑出土土器群

須恵器杯蓋と土師器の壺、鉢が図化されている。いずれも7世紀代の後半に遡る資料と考えられ、時期的には古墳時代後期の第372号住居址出土土器群に匹敵する内容と考える。

(ス) その他の土器群

少ない個体数から時期判別を行うのはかなり危険性が伴うが、取て想定すれば第360号住居址は4~6期、第365号住居址は3~5期、第366号住居址は4~6期、第371号住居址は古墳時代後期7世紀後半、第374号住居址は6~7期、第4号十坑が6~8期、第9号土坑が5~7期、溝6は7~8世紀代全般となろう。

参考文献

1 竹原守 1994「上器」『松本市文化財調査報告No.115 出川市蓮池IV・平田里古墳群緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会

2 小平和男 1990「古代の土器」『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘監査報告書4—松本市その1—総論編』長野県教育委員会

3 堀隆 1987「佐久東方における様相」『長野県考古学会誌 信濃における奈良時代を中心とした攝牛と土器様相—』55・56 長野県考古学会

4 原明芳 1996「甲信地域の8・9世紀の煮炊具」『古代の土器研究』律令的土器様式の西・東4 煮炊具—』古代の土器研究会

5 吉井雅尚 1996「信濃における奈良・平安時代の土師器壺について」『鍋と壺そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

2 石製品

4点の石器が出土した。内訳は、凹・磨石1点、砥石1点、剥片1点、不明1点(砂岩)である。このほかに人為・自然行為が判然としない礫片4点(砂岩1点、硬砂岩2点、凝灰岩1点)と被熱した砂岩の破片1点が出土している。以下では定形的な石器2点、剥片1点について図化し、種類別に記載する。

凹・磨石(第22図1)

凹み、磨面の両方を併せもつた形凹・磨石とした。扁平な砂岩製で、平面形が不整な橢円形礫を素材とする。表裏両面には、礫の中央から少し外れた位置に敲打による凹みが1箇所ずつあり、表の凹みは長軸×短軸×深さが36.6×24.5×5.8mm、裏は28.4×21.7×2.9mmと違いがある。右側面に107.5×18.9mmの磨面がある。

砥石(第22図2)

片側が折損しているが、やや扁平な角柱状の砂岩礫を素材にし、平面形は長方形を呈していたと考えられる。表裏両面と右側面(図での上)の3面に砥面が観察された。右側面は下方でわずかに内湾しており、長辺と平行す

る線状痕がみられる。裏面には、金属製品の刃を斜めに立てて研いだと考えられる、幅・深さ共にmm以下の多数の線状痕が観察される。

剥片(第22図3)

灰色のチャートを素材とする。片面の下間に原石の表皮が認められる。360住北側の遺物包含層から出土した。

3 鉄製品(第22図1~3)

5点出土したうちの3点を図示した。1・2は刀子である。いずれも373住の床面直上から出土した。1はほぼ完形で、関は棟側に緩く設け、刃側は不明瞭である。身部の形態はほぼ直線的に伸び、切先付近で角を持つ。2は茎部が欠損するが、刃側に闇を設け、棟側は不明瞭である。3はヤリガンナである。刃部に向かって幅が広くなり、緩やかに反っている。

第5表 土器観察表

No.	地点	種別	器種	寸法			残存度	成形・調整等		実測 番号	注記	
				口径	底径	高さ		外側	内側			
1	360住	茶器	杯A	12.9	6.3	3.5	5/6 完	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ、工具ナデ	360住03		
2	360住	茶器	蓋B	13.6	—	—	1/8 —	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	360住04	360住003	
3	360住	土師器	焼B	22.8	—	—	3/8	緩ハケメ、ヨコナゲ	カキメのち紙工具ナデ	360住018	361住049	
4	360住	土師器	焼B	—	—	6.8	1/6	緩ハケメ、底面ナゲ	緩の工具ナデ	360住012	360住006	
5	360住	須恵器	鏡A	—	—	—	一部	クロナゲ	クロナゲ	360住015	360住012	
6	361住	黒色A	杯A II	13	5.6	3.7	完	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住01	361住069	
7	361住	黒色A	杯A II	14.2	6.6	3.8	1/4	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住3	361住047	
8	361住	黒色A	杯A II	12.6	5.4	4.3	1/4	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住2	361住074-079	
9	361住	黒色A	杯A I	16.6	7.2	5.3	1/2	一部	クロナゲ、手持ちケメリ	ミガキのち黒色処理	361住5	361住060-072
10	361住	黒色A	杯A I	—	—	7.4	1/4	クロナゲ、回転糸切のちカ ズリ	ミガキのち黒色処理	361住4	361住076-079	
11	361住	須恵器	杯A	14	6.4	4	完	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	361住9	361住057	
12	361住	須恵器	杯A	13.4	6	3.7	1/4	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	361住10	361住076	
13	361住	須恵器	杯A	—	—	—	一部	クロナゲ	クロナゲ	361住11	361住073	
14	361住	須恵器	杯A	—	—	6.2	1/2	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	361住13	361住079	
15	361住	須恵器	杯A	—	—	7.2	1/4	クロナゲ、回転糸切、ヘラ削 り	クロナゲ	361住12	361住072	
16	361住	土師器	焼C	23	—	—	1/5	コナゲ、横ケメリ、タキメ	ヨコナゲ、工具ナデ	361住8	361住066-067	
17	361住	土師器	焼B	20.2	—	—	1/5	コナゲ、緩ハケメ	カキメ、工具ナデ	361住7	361住059-072	
18	361住	土師器	蓋	17	—	—	1/10	コナゲ、ミガキ?	ヨコナゲ、ミガキ	361住6	361住076	
19	361住	須恵器	黒色A	4.2	—	—	—	クロナゲ	クロナゲ	361住14	361住079	
20	361住	須恵器	長颈甌	—	—	5.2	2/3	クロナゲ、回転ケメリ、付高 台	クロナゲ	361住15	361住076	
21	362住	黒色A	杯A II	13	5.6	4	1/2	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住1	362住096-117-172-	
22	362住	黒色A	杯A II	13	—	—	1/4	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住5	362住178-179	
23	362住	黒色A	杯A II	13.2	6.8	3.8	4/5 完	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住6	362住101	
24	362住	黒色A	杯A II	13.1	5.4	2.85	1/5 完	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住3	362住173	
25	362住	黒色A	杯A II	13.6	6	3.9	1/3 7/8	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住9	362住093-179-196	
26	362住	黒色A	杯A II	12.4	—	—	1/4	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住6	362住179	
27	362住	黒色A	杯A II	—	—	5.4	1/4	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住7	362住179	
28	362住	黒色A	杯A II	12.35	5	3.95	1/8 完	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住4	362住174-187	
29	362住	黒色A	杯A II	12.9	6.2	4	1/2	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住8	362住110-178	
30	362住	黒色A	杯A II	—	—	6.4	1/4	クロナゲ、回転糸切、墨書き	ミガキのち黒色処理	362住24	362住183	
31	362住	黒色A	杯A I	—	—	5.8	1/4	クロナゲ、墨書き	ミガキのち黒色処理	362住26	362住186	
32	362住	黒色A	杯A I	16.2	—	—	1/4	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住11	362住098	
33	362住	黒色A	杯A I	16.2	—	—	1/6	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住10	362住164	
34	362住	黒色A	杯A I	19.6	8	5.5	3/8 1/12	クロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住12	362住233-240-279-281- 286	
35	362住	黒色A	鉢	22.4	—	—	1/6	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住15	362住178	
36	362住	黒色A	皿B	13.05	7	2.95	5/8 完	クロナゲ、回転糸切、付高台	ミガキのち黒色処理	362住13	362住092-104	
37	362住	黒色A	皿B	13.1	6.4	2.55	1/2 完	クロナゲ、回転糸切、付高台、刻字	ミガキのち黒色処理	362住14	362住102	
38	362住	土師器	蓋A	32.2	—	—	1/12	クロナゲ	クロナゲ	362住23	362住194	
39	362住	須恵器	杯A	13.4	5.4	3.75	1/4 完	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	362住31	362住165-178-190-193	
40	362住	須恵器	杯A	13	5.1	3.25	3/8 1/2	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	362住30	362住180	
41	362住	須恵器	杯A	13.05	5.1	3.4	2/3 完	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	362住28	362住087	
42	362住	須恵器	杯A	13.8	7.6	3.2	3/8 1/2	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	362住29	362住183-187	
43	362住	須恵器	杯A	13	6.4	3.9	1/8 1/2	クロナゲ、回転糸切、底面ハ ケメ工具ナデ?	クロナゲ	362住32	362住144	
44	362住	須恵器	杯A	12.8	6.6	3.85	1/10 1/4	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	362住33	362住180	
45	362住	須恵器	杯A	12.8	6.8	3.9	1/10	クロナゲ、回転糸切	クロナゲ	362住34	362住180	

No.	地点	種類	器形	寸法 口径 底径 高さ	残存度 口部 底部	成形・調整等		案内 番号	注記
						外面	内部		
46	362住	須恵器	杯A	13.7	6.4	4.1	3/4 完	ロクロナデ、回転糸切	362住35 362住100
47	362住	須恵器	杯A	17.8			1/4	ロクロナデ	362住27 362住183
48	362住	須恵器	無B					ロクロナデ	362住36 362住182-183
49	362住	土師器	小壺D	8.8	5.3	8.1	完	ロクロナデ、カキメ、回転糸切	362住16 362住127
50	362住	土師器	小壺D	13.4	6.8	15.1	1/4 1/3	縦ハケメ、工具ナデ	362住17 362住105-107-115-170-178-179-181
51	362住	土師器	甕B	22.4			1/3	縦ハケメ	362住22 362住222-163-172-193
52	362住	土師器	甕B	21.2			1/3	縦ハケメ	362住20 362住149-168-179-
53	362住	土師器	甕B	20.6			1/4	縦ハケメ	362住21 362住175-179-
54	362住	土師器	甕B	15.9			1/2	縦ハケメ	362住18 154-155-174-183
55	362住	土師器	甕B	21			僅	縦ハケメ	362住19 149-151-188-178-179-187-365-299
56	362住	須恵器	長頸甕					ロ横横ハケメ、工具ナデ	362住38 160-167-177-178-186-191-198
57	362住	須恵器	甕D	18.3			1/6	ロクロナデ	362住37 362住178-190-196
58	362住	須恵器	?	38			1/12	ロクロナデ	362住40 362住179
59	362住	須恵器	?	44			1/16	ロクロナデ	362住39 362住168-178
60	363住	黒色A	杯A I	16.25	6.6	5.75	1/3 5/6	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理 363住1 362住181-193-363住206-219
61	363住	黒色A	杯A II	13.7	6.5	4.2	完	ロクロナデ、回転糸切のち中 央部工具ナデ	ミガキのち黒色処理 363住2 363住207-219-221-227
62	363住	須恵器	杯A	12.4	6	4.05	2/5	1/5 ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 363住4 363住181-219-227
63	363住	須恵器	杯A	15	7.3	4	1/14	僅 ロクロナデ、手持グリ	ロクロナデ 363住5 363住224
64	363住	須恵器	杯B	12.6				ロクロナデ	363住3 363住221
65	363住	須恵器	杯B	9			1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 363住6 363住19-227
66	363住	須恵器	瓶B	14.2	-		1/13	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 363住7 363住223
67	363住	土師器	小壺D	12.2				ロクロナデ、カキメ	363住8 363住181-202-219-227-229-843
68	363住	土師器	甕B	25			1/9	縦ハケメ	363住9 363住219-227-229-
69	363住	須恵器	甕C	16			1/10	ロクロナデ	363住10 363住200-215
70	363住	須恵器	甕C	7	7	7	1/10	ヨコナデ、タキナデ	363住11 363住198
71	364住	黒色A	杯A I	16.8	7	4.7	5/8 完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのら黒色処理 364住1 364住256-267
72	364住	黒色A	杯A II	12.2	5.8	3.4	1/6 3/8	ロクロナデ、手持グリ	ミガキのら黒色処理 364住2 364住232
73	364住	黒色A	杯A I	15.4	7.2	4.4	1/3 2/3	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのら黒色処理 364住3 364住243-253
74	364住	黒色A	杯A I	15.8			1/12	ロクロナデ	ミガキのら黒色処理 364住4 364住281
75	364住	黒色A	杯A I	17.6			1/8	ロクロナデ	ミガキのら黒色処理 364住5 364住277
76	364住	黒色A	杯A I	7.8			1/4	ロクロナデ	ミガキのら黒色処理 364住6 364住273
77	364住	秋須恵	杯A	12.8			1/12	ロクロナデ	ミガキのら黒色処理 364住7 364住286
78	364住	須恵器	杯A	13.6	6.2	3.3	1/4 1/2	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのら黒色処理 364住8 364住244
79	364住	須恵器	杯A	13.1	6.2	3.8	1/2 4/5	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 364住12 362住178-364住247-274-8/179
80	364住	須恵器	杯A	14	7.2	4	僅	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 364住14 364住272
81	364住	須恵器	杯A	6.2			1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 364住15 362住190-364住244
82	364住	須恵器	甕	12.8			1/8	ロクロナデ	ロクロナデ 364住16 364住280
83	364住	土師器	甕	32			1/10	縦ハケメ	ロ横カキメ、工具ナデ、 握指ナデ 364住18 364住236-275
84	364住	土師器	小壺D	8			完	ロクロナデ、カキメ、回転糸切	ロクロナデ 364住17 364住256
85	364住	土師器	甕B	24.8			1/12	縦ハケメ	ロ横カキメ、工具ナデ 364住9 364住235-237-267-268
86	364住	土師器	甕B	11.4			1/12	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ 364住10 364住238-241-267
87	364住	須恵器	長頸甕	18.2				ロクロナデ	ロクロナデ 364住11 364住276
88	365住	須恵器	杯B	13.8	9.8	3.5	1/6	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 365住12 365住290
89	365住	須恵器	蓋B	16	-		1/14	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 365住13 365住300-301
90	365住	須恵器	甕A	23.5			1/5	タタキのちロクロナ	ロクロナデ 365住13 363住229-365住298
91	365住	須恵器	甕A	27			1/8	ロクロナデ、波状紋	ロクロナデ 365住15 365住305
92	365住	須恵器	甕A	26.9			1/5	ロクロナデ、タキ	ロクロナデ 365住14 365住293
93	366住	土師器	甕B	20.8			1/12	縦ハケメ	ロ縦コナデ、横ハケメ 366住1 366住305
94	366住	土師器	甕B	8.4			1/3	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ 366住2 366住305
95	367住	黒色A	杯A I	16.8	7.6	5.7	1/8 1/3	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理 367住1 367住351-352-363
96	367住	須恵器	杯A	12.7	6	3.2	3/4 完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 367住10 352
97	367住	須恵器	杯A	12.8			1/6	ロクロナデ	ロクロナデ 367住1 367住351-358-361
98	367住	須恵器	杯A	13.2	6.2	3.1	1/4 1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 367住11 367住355-363
99	367住	須恵器	杯A	12.9	5.6	3.6	2/3 完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 367住12 367住339-340-352
100	367住	須恵器	杯A	14.4	6	4.1	1/2 完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ 367住13 346-347
101	367住	須恵器	蓋	15.6	-		1/2	ロクロナデ	ロクロナデ 367住14 367住355
102	367住	土師器	小壺D	10.4			1/3	ロクロナデ、カキメ	ロ横カキメ、ロクロナデ 367住15 367住355
103	367住	土師器	甕B	21.6			1/12	ヨコナデ、斜ハケメ	羅連束秋状工具の横のナ デ 367住16 367住337-338-353
104	367住	土師器	甕B	7.6			4/5 縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ 367住16 367住335-359	

番	地点	種別	機器 器形	寸法 口径	底径	器高	残存度 口盤	底部	成形・調整等		裏面 番号	注記
									外面	内面		
165	367住	上師器	甕	25.2		1/3	横ハケメのちクロナデ	縦ハケメ	367住4	367住315-325-329-333-336-346-347		
166	367住	上師器	甕B		8.6		1/3	横ハケメのち粘土布上工具ナデ	縦ハケメ	367住7	367住323-331-334-374E708	
167	367住	須恵器	甕A	31		一部	クロナデ	ロクロナデ	367住13	367住351-横出函850		
168	368住	黒色A	鉢	16.4	9.6	5.2	1/3 完	ロクロナデ、手持ケツリのち ミガキ、口縁濁泥	縦かいミガキのち墨色 処理	368住1	368住365-366-370-373-387-393-398	
169	368住	須恵器	杯	11.8		1/10		ロクロナデ	ロクロナデ	368住9	368住410	
170	368住	須恵器	杯	12		1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	368住10	368住414	
171	368住	須恵器	杯	12.4		1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	368住11	368住409	
172	368住	須恵器	杯B	12	9.2	3.6	1/4 1/3	ロクロナデ、回転糸糸のち回 転ケツリ	ロクロナデ	368住6	368住372-404	
173	368住	須恵器	杯B	14.4			1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	368住8	368住385	
174	368住	須恵器	杯B	15.8	10.6	5.3	1/16 1/4	ロクロナデ、回転糸糸のち回 転ケツリ	ロクロナデ	368住7	368住368	
175	368住	須恵器	甕A	13.8			1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	368住12	368住418	
176	368住	須恵器	甕B	14		3/4	-	コクロナデ、回転ケツリ、沈原	ロクロナデ	368住4	368住384-397-399-402-409	
177	368住	須恵器	甕B	-			-	コクロナデ、回転ケツリ	ロクロナデ	368住5	368住388-389-390-401-407-410-411	
178	368住	土師器	小壺皿B	6.4		1/3	横ハケメ	斜へ底ハケメ	工具ナデ	368住3	368住420	
179	368住	土師器	甕B	19.6		1/7		ロクロナデ	ロクロナデ	368住2	368住382	
180	369住	須恵器	杯A	13.8		1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	369住7	368住381-369住437	
181	369住	須恵器	杯B	12.4		1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	369住8	369住436	
182	369住	須恵器	杯B	11.6			1/2	ロクロナデ、底面ナデ、縫跡 コクロナデ、回転糸糸のち回 転ケツリ	ロクロナデ	369住10	369住436	
183	369住	須恵器	杯B	10.6	7.2	4.2	7/8 完	ロクロナデ、回転糸糸のち回 転ケツリ	ロクロナデ	369住5	369住431	
184	369住	須恵器	杯B	12.3	9.1	3.6	1/2 1/2	ロクロナデ、回転糸糸のち回 転ケツリ	ロクロナデ	369住11	369住428-430-440	
185	369住	須恵器	杯B	12.8	9.6	3.9	1/4 1/4	ロクロナデ、回転ケツリ	ロクロナデ	369住6	369住432	
186	369住	須恵器	蓋B	15.8	-		1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	369住4	369住E444	
187	369住	土師器	甕A	18.2			1/8	ヨコナゲ、ハケメ、工具ナデ ハケメ	ロクロナデ	369住2	369住E440	
188	369住	土師器	甕B	-					工具ナデ	369住3	369E427-433-436-440	
189	369住	土師器	甕B	9		4/5	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ	369住1	369住E424-425-440		
190	369住	土師器	甕B	9.4		1/3	ロクロナデ、回転糸糸のち回 転ケツリ	ロクロナデ	369住9	369住429		
191	370住	黒色A	杯A I	15.9	7.6	4.3	1/18 1/8	ロクロナデ、回転糸糸のち ロクロナデ	ミガキのち黒色地殻	370住1	370住467	
192	370住	須恵器	杯A	8.3			2/5	ロクロナデ、回転ヘラ切	ロクロナデ	370住2	370住457-487	
193	370住	須恵器	甕B	15.4		3.6	1/8	ロクロナデ、回転ケツリ	ロクロナデ	370住3	370住463-492	
194	370住	須恵器	甕B	16.3	-	3.1	3/4	ロクロナデ、回転ケツリ	ロクロナデ	370住4	370住460-474-481-496	
195	370住	須恵器	甕	25		1/16		縦ハケメのちロクロナデ 口縁ヨコナゲ、胴部タキタ のち工具ナデ	斜ハケメのちナデ	370住5	370住461	
196	370住	土師器	甕	22.8		1/8		口縁ヨコナゲ、胴部タキタ のち工具ナデ	斜ハケメのちナメ	370住6	370住465-464-468-475-483-484-490	
197	370住	須恵器	甕A	22.4		3/4		ロクロナデ、胴部タキタ	ロクロナデ、胴部工具瓶	370住5	370住449-450-451	
198	370住	須恵器	甕E	33.4		1/4		ロクロナデ、胴部タキタ	ロクロナデ	370住6	370住462-470	
199	370住	須恵器	甕	14			1/21	タキタ	当具瓶ナデ酒、工具ナデ	370住7	370住482	
200	371住	土師器	甕A	11.6		1/14		ヨコナゲ、ナデ	工具ナデ	371住1	371住711	
201	371住	土師器	甕A	9		1/3	ナデ、底面木蓋疊地	ナデ滅殲	371住2	371住500		
202	372住	土師器	杯	11.6	-	4.8	5/6 5/6	ヨコナゲ、手持ケツリ	ヨコナゲ、ナデ	372住1	372住538-539	
203	372住	土師器	杯	12.8	-	1/8	-一部	ヨコナゲ、手持ケツリ	ヨコナゲ、ナデ	372住3	372住546	
204	372住	土師器	杯	13.6	-	4.9	1/2 5/6	ヨコナゲ、ミガキ、手持ケツリ	縫かいミガキ	372住2	372住515-519-522	
205	372住	土師器	杯	12.6	-		1/8	ヨコナゲ、手持ケツリ	ミガキのち黒色地殻	372住6	372住539-546	
206	372住	土師器	杯	13.6	-		1/14	ヨコナゲ、手持ケツリ	ミガキのち黒色地殻	372住5	372住535	
207	372住	土師器	杯	12.4	-		1/12	ヨコナゲ、手持ケツリ	ミガキのち黒色地殻	372住4	372住545	
208	372住	土師器	杯	25	-		1/4	ヨコナゲ、工具ナデ、手持ケツ リ	縫かいミガキ	372住9	372住514	
209	372住	須恵器	杯	12.1	-	4.2	一部	ロクロナデ、回転ケツリ	ロクロナデ	372住13	372住513	
210	372住	土師器	甕	14.8		1/6		ヨコナゲ、工具ナデ	工具ナデ	372住8	372住539-27-778	
211	372住	土師器	甕	19.6		1/4		ヨコナゲ、ケツリのちミガキ	ミガキのち黒色地殻	372住7	372住531-542-546	
212	372住	土師器	甕	13.4			一部	ヨコナゲ、縫ミガキ	縫ミガキ	372住11	543-545	
213	372住	土師器	甕	27.6			一部	ヨコナゲ、工具ナデ、ミガキ	工具ナデ、縫ミガキ	372住10	372住525	
214	372住	土師器	甕	20			一部	ヨコナゲ	縫ミガキ	372住12	372住531-539	
215	372住	須恵器	甕	22.2			1/8	ロクロナデ、胴部タキタ	ロクロナデ、同心円紋当 具底	372住14	537-27-746-764-765-766-767-768-769-770-771-781-783	
216	373住	土師器	杯	17	12.6	2.6	5/12 1/2	ヨコナゲ、底面手持ケツリ	ヨコナゲ、斜放射暗文	373住1	654-666-669-679-681-690-691	
217	373住	土師器	杯	12.2			一部	ヨコナゲ	ミガキのち黒色地殻	373住2	373住633	
218	373住	須恵器	杯B	10.6	-		1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	373住28	373住638	
219	373住	須恵器	杯	12			1/6	ロクロナデ、天井回転ケツリ	ロクロナデ	373住27	373住361	
220	373住	須恵器	杯身					ロクロナデ	ロクロナデ	373住26	373住667-668	
221	373住	須恵器	杯A	14.6	7	4.7	2/3 完	ロクロナデ、ヘラ切のち手持 ケツリ	ロクロナデ	373住32	373住605-655	

施 地点	種別	部品	寸法 口径 底径 最高 口径 底部	残存度 数	成形・調整等		実測 番号	注記
					外側	内面		
162 373住	洗東器	杯A	13.8 6.6 4.1 1/4 1/2	2	クロコナデ、底部工具ナデ	クロコナデ	373住39 373住563	
163 373住	洗東器	杯A	12.4 7.2 3.7 1/8	2	クロコナデ、底部手持ケズリ	クロコナデ	373住31 373住684	
164 373住	洗東器	杯A	10.8	1	1/5 ロクロコナデ、底部工具ナデ	クロコナデ	373住29 373住546	
165 373住	洗東器	杯A	11.6 7.2 2.2 1/8	1	一部 ロクロコナデ、回転工具	クロコナデ	373住46 373住669	
166 373住	洗東器	杯A	9	1/4	ロクロコナデ、底部工具ナデ、ヘラ 記号	クロコナデ	373住47 373住662	
167 373住	洗東器	杯A	13.6 7.6 3.4 5/12	1/2	ロクロコナデ、回転ヘラ切のち ナデ	ロクロナデ	373住36 373住623	
168 373住	洗東器	杯A	14.2	1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	373住44 373住662-671	
169 373住	洗東器	杯A	13.6	1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住42 373住653-663	
170 373住	洗東器	杯A	14	1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住41 373住684-685	
171 373住	洗東器	杯A	13.6 6.2 3.6 1/8	1/3	ロクロコナデ、回転ヘラ切のち ナデ	ロクロナデ	373住37 373住608-657	
172 373住	洗東器	杯A	13.8 8.6 4.1 完	完	ロクロコナデ、ヘラ切のち工具 ナデ	ロクロナデ	373住33 373住584-600-655	
173 373住	洗東器	杯A	13.6 6.3 3.7 1/4	完	ロクロコナデ、回転ヘラ切のち ナデ	ロクロナデ	373住35 373住566-655-688- 689	
174 373住	洗東器	杯A	13.2 6.6 4.4 1/4	完	ロクロコナデ、ヘラ切のち工具 ナデ	ロクロナデ	373住34 373住587	
175 373住	洗東器	杯A	12.6 6.4 4.2 1/5	1/3	ロクロコナデ、底面工具ナデ	ロクロナデ	373住38 373住662	
176 373住	洗東器	杯A	13.4	1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住43 373住666	
177 373住	洗東器	杯A	14 7.6 4.2 一部	1/5	ロクロコナデ、底面工具ナデ	ロクロナデ	373住40 373住688	
178 373住	洗東器	杯A	9	1/3	ロクロコナデ、ヘラ切のち手持 ケズリ	ロクロナデ	373住30 373住666	
179 373住	洗東器	杯A	14	1/8	ロクロコナデ	ロクロナデ	373住45 373住689	
180 373住	洗東器	杯B	17.6	1/10	ロクロコナデ	ロクロナデ	373住55 373住690	
181 373住	洗東器	杯B	17.4 12 6.8 2/5	2/3	ロクロコナデ、底面回転ケズリ、 ヘラ切部分	ロクロナデ	373住50 373住553	
182 373住	洗東器	杯B	11.6 8.6 3.2 25 一部	1/2	ロクロコナデ、底面回転ケズリ	ロクロナデ	373住56 373住653-656-687	
183 373住	洗東器	杯B	15.1 10.7 4.05 7/8 完	完	ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住48 373住615	
184 373住	洗東器	杯B	15.6 11 3.9 一郎 完	完	ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住52 373住571-576	
185 373住	洗東器	杯B	14.8 11.0 4 1/8 1/4	1/4	ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住54 373住658	
186 373住	洗東器	杯B	14.4 10.6 3.9 1/2 1/2	1/2	ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住53 373住634-663	
187 373住	洗東器	杯B	15.5 11.6 3.7 一部	7/8	ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住57 373住662-671-672	
188 373住	洗東器	杯B	15 10.8 4.1 1/3	完	ロクロコナデ、回転ケズリのち 工具ナデ	ロクロナデ	373住51 373住562-662-665	
189 373住	洗東器	杯B	14.1 10.6 4.15 1/2	完	ロクロコナデ、回転ケズリのち 工具ナデ	ロクロナデ	373住49 373住564-647-655-	662
190 373住	洗東器	蓋A	17.4 6.4 2.5 2/3	1/8	ロクロコナデ、回転角崩	ロクロナデ	373住22 373住560	
191 373住	洗東器	蓋B	16.2	3/4 3/8	ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住25 373住573-574-575- 576	
192 373住	洗東器	蓋B	16.2	- 3.8 5/8	- ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住23 643-648-653-654- 663-680	
193 373住	洗東器	蓋B	16.2	- 3.2 1/2	- ロクロコナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住24 373住641	
194 373住	洗東器	無頭部	11	-	ロクロコナデ、回転角崩	ロクロナデ	373住58 373住567	
195 373住	土師器	小型窓	10.2	1/6	ロコカゲ、横ケズリ	ロコカゲ、横ケズリ	373住44 373住607	
196 373住	土師器	小型窓	8	1/3	ナガレ取	工具ナデ	373住47 373住662-665	
197 373住	土師器	小型窓	8.6	4/5 1/8	ハケス、底面ハケメ	ハケス	373住16 373住688	
198 373住	土師器	小型窓	14.6	1/10	ロコカゲ	ロコカゲ、カキメ?	373住55 373住665	
199 373住	土師器	美A	13.6	1/6	ロコカゲ、工具ナデ	指研工具、工具ナデ	373住56 373住668-665	
200 373住	土師器	美A	15.4	1/6	ロコカゲ、深掘ハケメ	カキメ、工具ナデ	373住19 373住638	
201 373住	土師器	小美D	14.6	1/4	ロクロコナデ、カキメ	ハケス	373住3 373住566	
202 373住	土師器	小美D	18.2	1/2	ハケスのらカキメ	カキメ	373住8 373住660-662-665-	680-681
203 373住	土師器	美B	19.4	-	ロコカゲ、底ハケメ	ロ横研ハケメ、工具ナデ	373住20 373住667	
204 373住	土師器	更A	23.4	1/6	ロコカゲ	ロコナデ	373住21 373住647	
205 373住	土師器	更A	25.6	1/6	ロコカゲ、底ハケメ	ロコナデ、工具ナデ	373住17 373住678-691	
206 373住	土師器	更C	23.6	1/10	ロコカゲ、口縁壊部に沈線	ロコナデ、工具ナデ	373住18 373住609	
207 373住	土師器	更B	21.6	1/6	ロコカゲ、底ハケメ	ロコナデ、横工具ナデ	373住10 373住597	
208 373住	土師器	更B	20.2	1/5	ロコカゲ、底ハケメ	ロコナデ、横工具ナデ	373住11 373住596-644	
209 373住	土師器	更B	19.8	1/2	ロコカゲ、底ハケメ	ロコナデ、横工具ナデ、 継沿ナデ	373住9 589-653-696	
210 373住	土師器	更B	7.4	1/3	横ハケメ、下端部横ハケメ、底 面ナデ	横~斜工具ナデ	373住14 613-652-660-661- 677	
211 373住	土師器	更B	8.8	-	横ハケメ	横~斜工具ナデ	373住13 373住581-627-644	
212 373住	土師器	更G	11	1/2	横ハケメ、底面ハケメ	横ハケメ	373住15 373住609-691	
213 373住	土師器	更G	13.2	充	底ハケメ、底面ナデ	底ハケメ	373住12 648-550-655-669- 670-671	
214 373住	洗東器	端C	31.6	-	ロコカゲ、タキシ	ロコナデ、工具ナデ	373住60 373住621	
215 373住	洗東器	端E	31.8	1/6	ロコカゲ、タキシ	ロコナデ、工具ナデ	373住59 373住595-647	
216 373住	洗東器	黒色A	12.4 6.2 3.6	1/6 1/8	ロクロコナデ、回転角崩	ミガキのち黒色処理	373住1 374-693-714	
217 373住	洗東器	黒A	6.6	1/4	ロクロコナデ、回転角崩	ミガキのち黒色処理	373住2 374-67114	
218 373住	洗東器	杯A	12.8	1/10	ロクロコナデ	ロクロナデ	374住6 374住7112	
219 373住	洗東器	皿B?	12.2	1/8	ロクロコナデ	ロクロナデ	374住7 374住7112	
220 373住	土師器	美B	18.8	1/6	横ハケメ	ロ横研カキメ、工具ナデ	374住4 374住701-711	
221 373住	土師器	更B	9	1/4	底ハケメ、底面ナデ	横ハケメ、工具ナデ	374住4 374住713	
222 373住	土師器	更B	9	1/4	底ハケメ、底面ナデ	横研ナデ、工具ナデ	374住5 374住712	

No.	地点	種別	器種 器形	寸法 口径	底径	高さ	残存度 口縁、底部	成形・調整等		実測 番号	注記	
								外観	内面			
223	4上	黒色A	杯 A II	11.7	4.7	3.45	1/5 1/4	クロナゲ、回転斧刃	ミガキのち黒色処理	4上1	4上718	
224	4上	黒色A	杯 A I	15			1/6	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	4上2	4上717	
225	4上	黒色A	杯 A I	15.5			1/8	クロナゲ	ミガキのち黒色処理	4上3	4上720	
226	4上	土師器	高杯					ナゲ	脚内工具ナゲ	4上5	4上717	
227	4上	土師器	小高杯		8.6		1/4	カキメ、回転斧刃	ロクロナゲ	4上4	4上722	
228	4上	須恵器	杯 A	4.9			壳	クロナゲ、回転斧刃	ロクロナゲ	9上1	9上745	
229	9上	須恵器	杯 B	12.7	8.9	3.35	1/12	クロナゲ	ロクロナゲ	9上2	9上746	
230	9上	土師器	小高杯	12.1			1/8	クロナゲ、カキメ	ロクロナゲ	9上3	9上745	
231	9上	土師器	束 B			10	1/12	模ハケメ、底面ナゲ	摩滅不明	9上4	9上727-733-735-745	
232	24上	須恵器	杯 A	12.6			1/6	クロナゲ	コクロナゲ	24上3	24上758	
233	24上	須恵器	杯 A	12.7	8.25	4.7	完	完	ロクロナゲ	24上1	24上754	
234	24上	須恵器	杯 A	14	8.55	3.75	2/3 5/6	ロクロナゲ、回転ケズリ、ヘラ	ロクロナゲ	24上3	24上755-757	
235	27上	須恵器	束	11.7	-	3.7	1/3	-	ロクロナゲ、ヘラ切削調整	ロクロナゲ	27上3	372往536-27上774-779
236	27上	土師器	鉢	15	8.9	12.5	1/3	完	脚内工具ナゲ	工具ナゲのち横ミガキ	27上1	27上780-782
237	27上	土師器	鉢	14.55	11	15.5	1/2	完	ヨコナゲ、模ハケメ、底部ケズリ	横ハケメ、横工具ナゲ	27上2	27上772-773
238	3周	土師器	高杯					底ミガキ	しぶり底、横ケズリ	3周1	3周797	
239	6周	土師器	杯	10.5			2/3	模ミガキのち黒色処理	模ミガキのち黒色処理	6周1	805-815+818	
240	6周	土師器	杯	5.5			9/10	ヨコナゲ、工具ナゲ	模ミガキのち黒色処理	6周2	815	
241	6周	土師器	瓶	10			1/10	ヨコナゲ	ナゲ	6周4	810	
242	6周	土師器	瓶	11.8			1/6	ヨコナゲ	ナゲ	6周3	807	
243	6周	須恵器	杯 B	14			一部	ロクロナゲ	ロクロナゲ	6周9	813	
244	6周	須恵器	杯 B	15.2			1/8	ロクロナゲ	ロクロナゲ	6周10	813	
245	6周	須恵器	杯 B	15.2			1/4	ロクロナゲ	ロクロナゲ	6周11	807-812	
246	6周	須恵器	高杯	9.8			1/4	ロクロナゲ	ロクロナゲ	6周12	809	
247	6周	土師器	小高杯 C	12.2			1/8	口縁折断、工具ナゲ	工具ナゲ	6周7	803	
248	6周	土師器	器 G	22			1/6	ヨコナゲ、化粧粘土塗布	ヨコナゲ	6周6	813	
249	6周	土師器	器 A	24			1/10	ヨコナゲ、カキメ	ヨコナゲ、カキメ	6周8	810	
250	6周	土師器	器 G	15.4			1/4	工具ナゲ	工具ナゲ	6周5	807	
251	7周	須恵器	器 E	11.3	5.6	4.8	7/8	光 ロクロナゲ、タタキ	ロクロナゲ	7周1	821	
252	8周	須恵器	鉢 A	12			1/12	ロクロナゲ	ロクロナゲ	8周2	826	
253	8周	須恵器	鉢	12.8			1/5	ロクロナゲ	ロクロナゲ	8周1	823	
254	石積 I	土師器	堆?	7.4			1/4	ヨコナゲ、化粧粘土塗布	ヨコナゲ、口縁端内削ぎ、化粧粘土塗布	石積1-1	828	
255	東包含	須恵器	杯 A	13.4	6.5	4.15	1/16	1/2 ロクロナゲ、回転斧刃	ロクロナゲ	東包1	835	
256	東検出	須恵器	杯 A	9.6			1/4	ロクロナゲ、回転ケズリ	ロクロナゲ	東検1	845	
257	東検出	土師器	器 C	21			1/6	ヨコナゲ、横ケズリ	ナゲ	東検2	845	
258	西検出	須恵器	器 A	43			1/14	ロクロナゲ、タタキ、工具ナゲ	ロクロナゲ	西検3	843	
259	西検出	土師器	杯	10.6			1/8	ヨコナゲ、横ミガキ	ヨコナゲ、横ミガキ	西検1	868	
260	西検出	須恵器	杯 B	11.5			1/3	ヨコナゲ、回転ケズリ	ヨコナゲ	西検2	861	
261	西検出	須恵器	蓋 B	18	-	3.4	1/4	ヨコナゲ、回転ケズリ	ヨコナゲ	西検3	867	
262	西検出	須恵器	鉢 A	10			1/4	ヨコナゲ、脚部回転ケズリ、底面ナゲ	ヨコナゲ	西検4	864	

※器種別の略称は「黒色A」が黒色土器A、「歎須恵」が軟質須恵器を指す。

第6表 石製品観察表

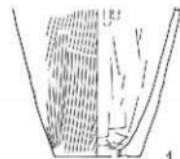
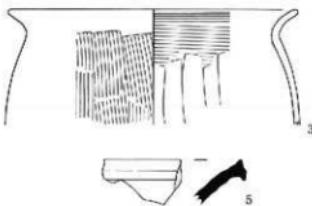
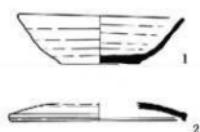
No.	出土地点	器種	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	欠損状況	備考
				長さ	幅	厚さ			
1	364床正面	凹・磨石	砂岩	154.5	78.0	29.5	(510.1)	ほぼ完形	両面に削ぎ、右側面が研磨。
2	357住土	砥石	砂岩	(109.0)	63.0	26.0	(316.5)	下半折損	研磨面2面、裏面に線状痕あり。
3	包含層	剥片	チャート	17.2	9.4	3.3	0.5		

※寸法および重量で、欠損が認められるものを()とし、残存値を表す。

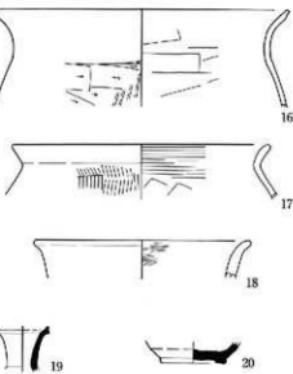
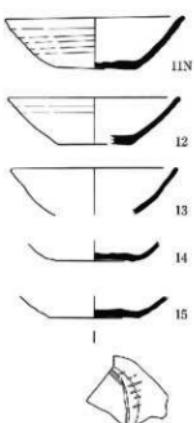
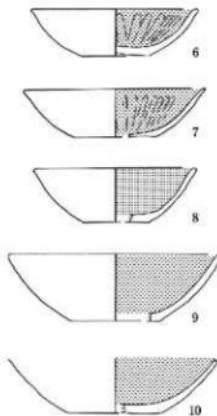
第7表 鉄製品観察表

No.	出土地点	器種	寸法 (mm)	重量 (g)	備考	ID
1	373住	刀子	143.4	13.2	5.6	11.7
2	373住	刀子	94.8	12.4	5.7	7.2
3	362住か	ヤリ・ガンナ	73.0	17.2	6.0	12.7
3	362住か	不明	22.0	10.2	9.5	2.4
3	363住	鍔錐	38.8	36.9	31.2	92.2

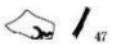
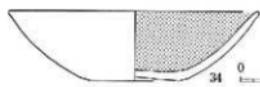
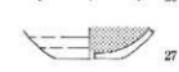
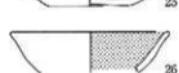
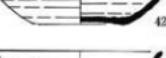
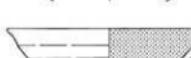
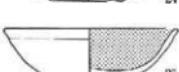
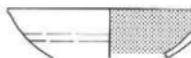
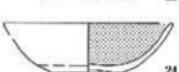
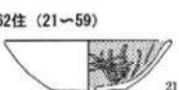
360住 (1~5)



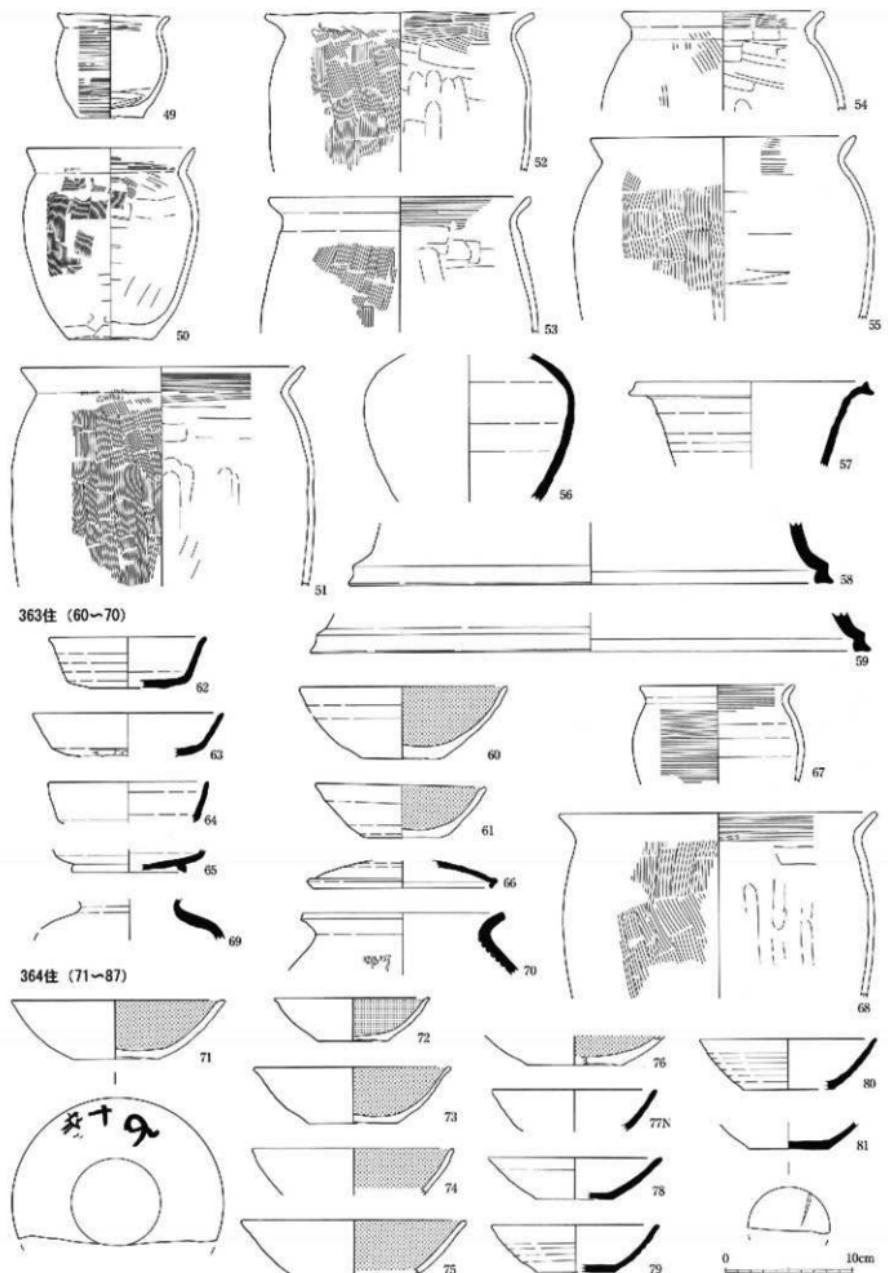
361住 (6~20)



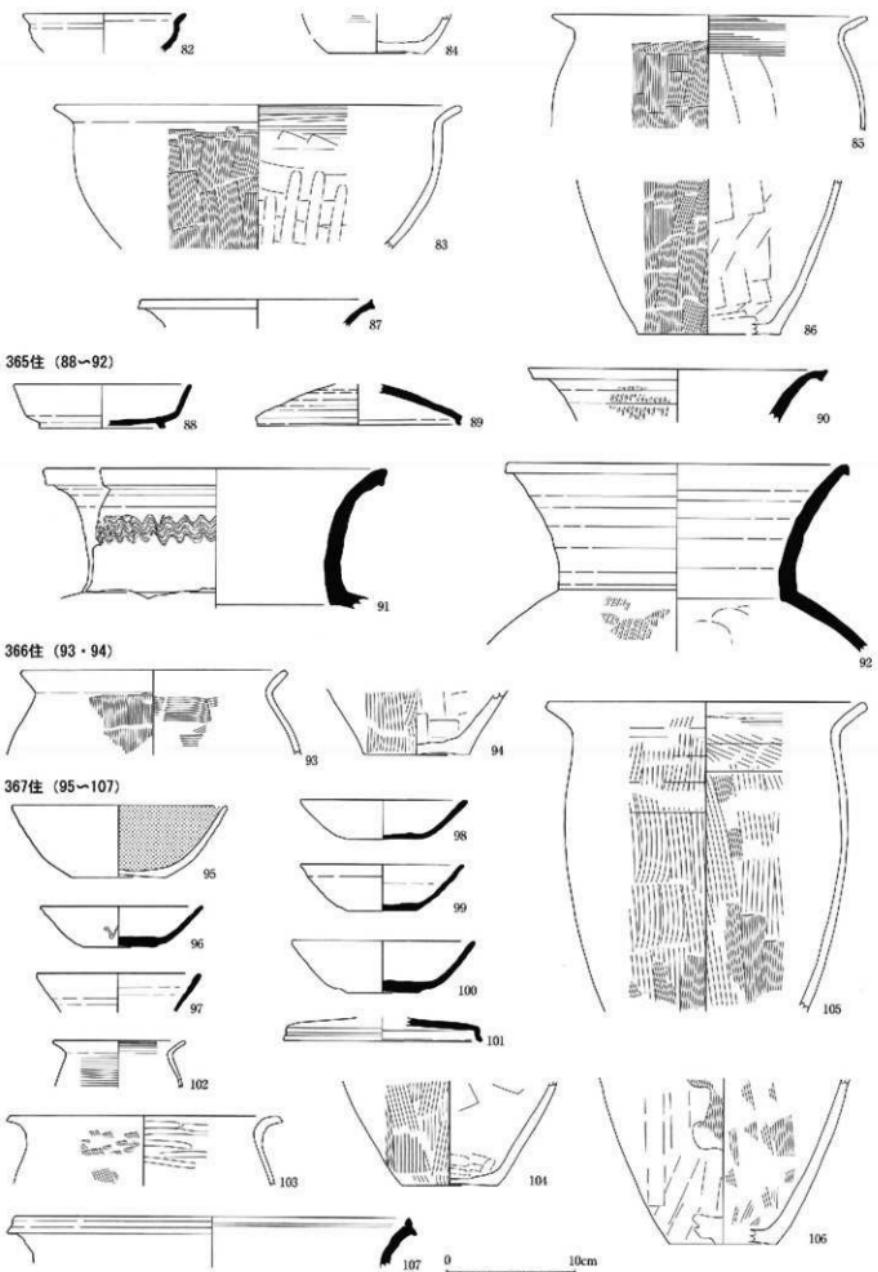
362住 (21~59)



第15図 遺物 (1)

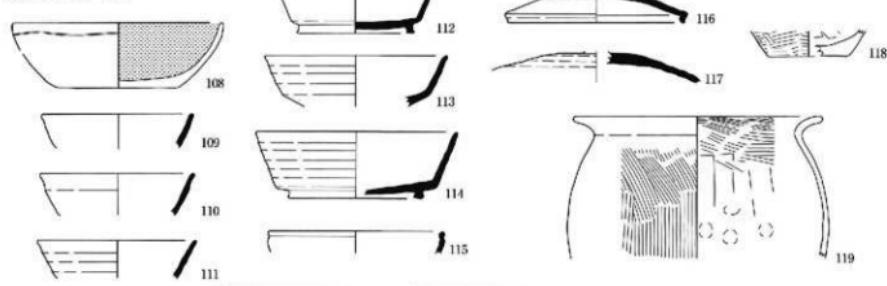


第16図 遺物 (2)

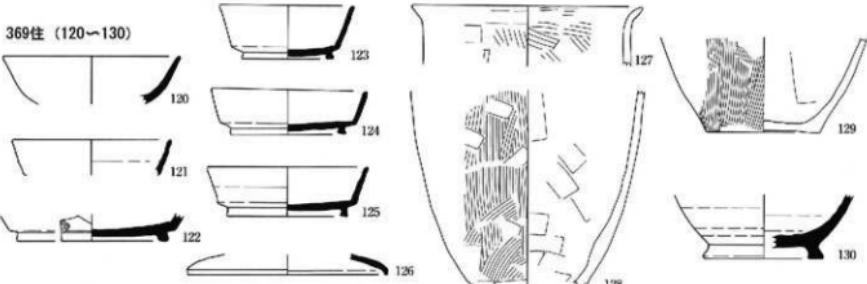


第17図 遺物 (3)

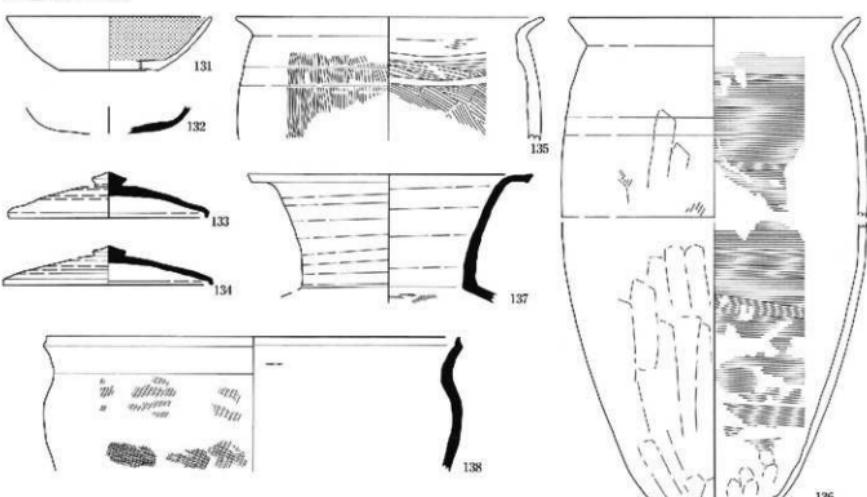
368住 (108~119)



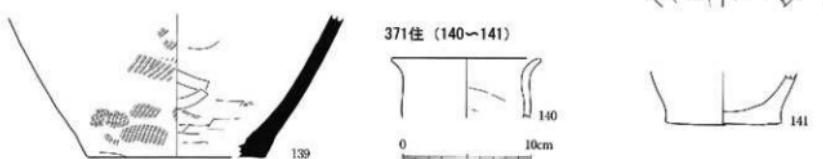
369住 (120~130)



370住 (131~139)

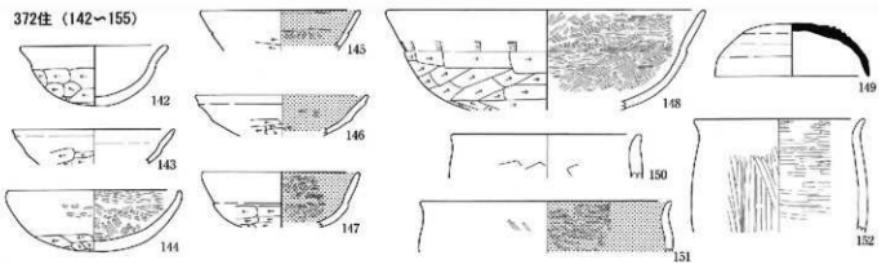


371住 (140~141)

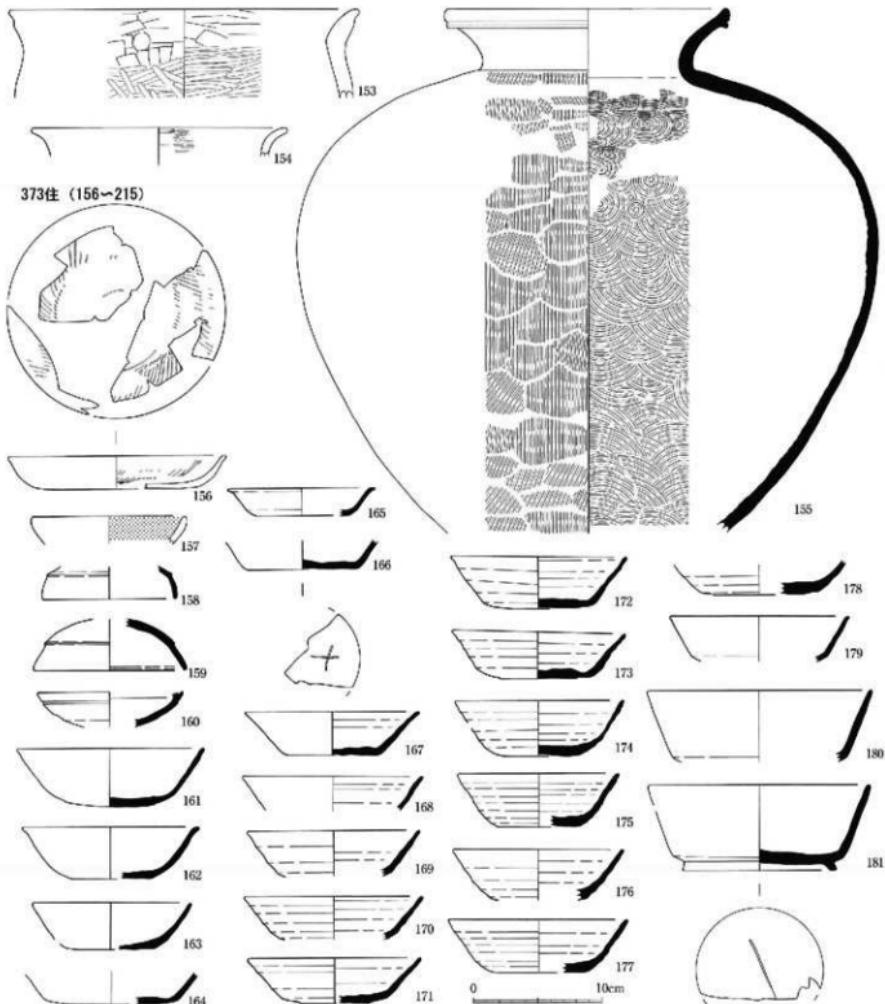


第18図 遺物 (4)

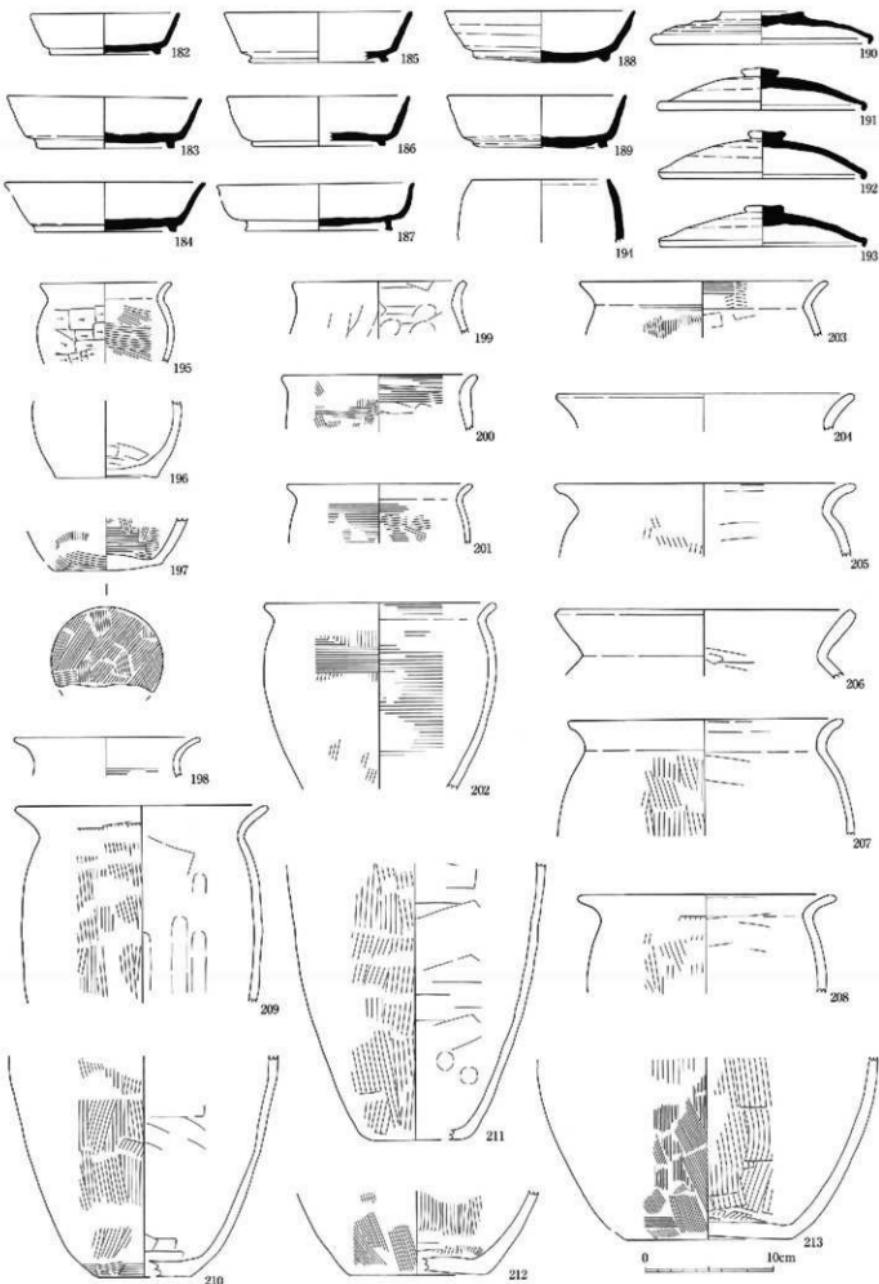
372住 (142~155)



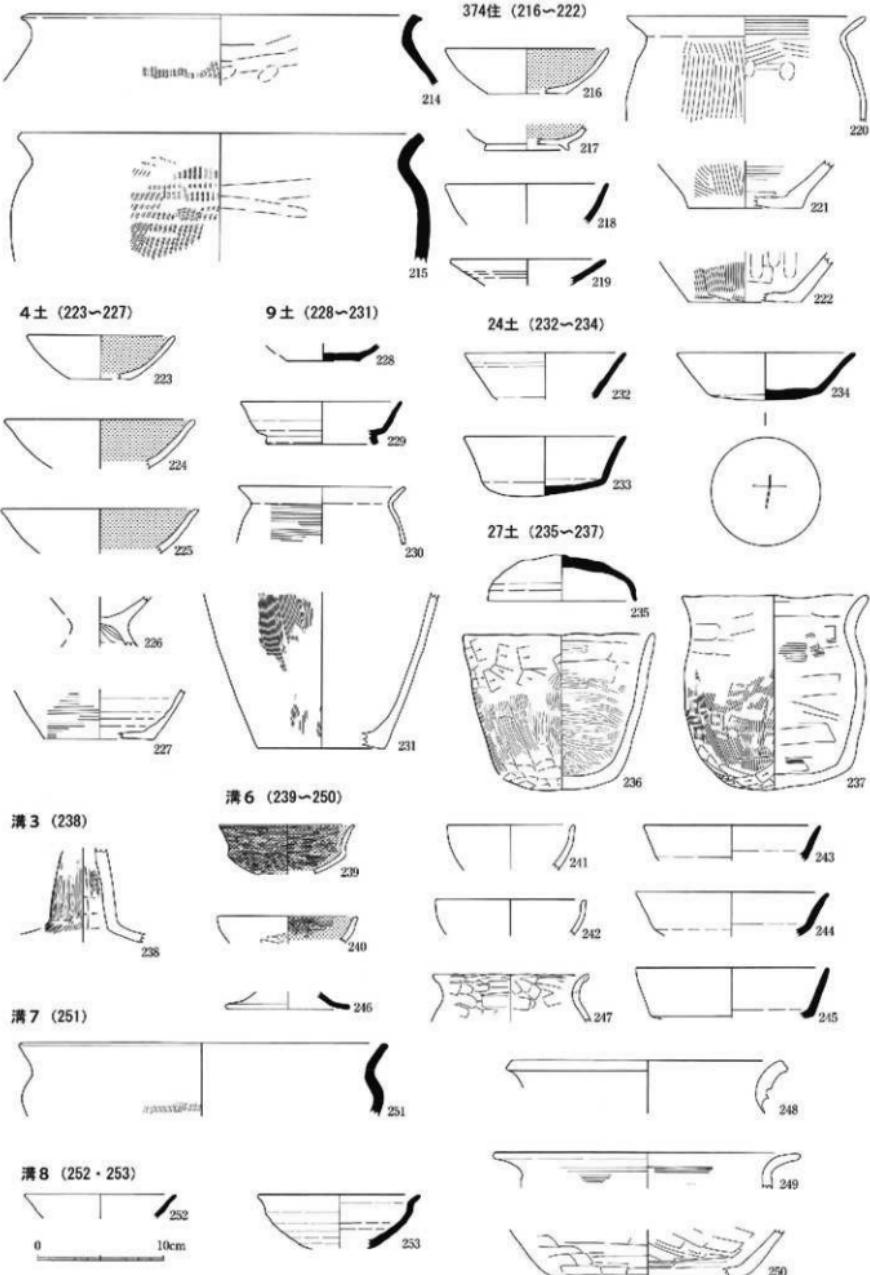
373住 (156~215)



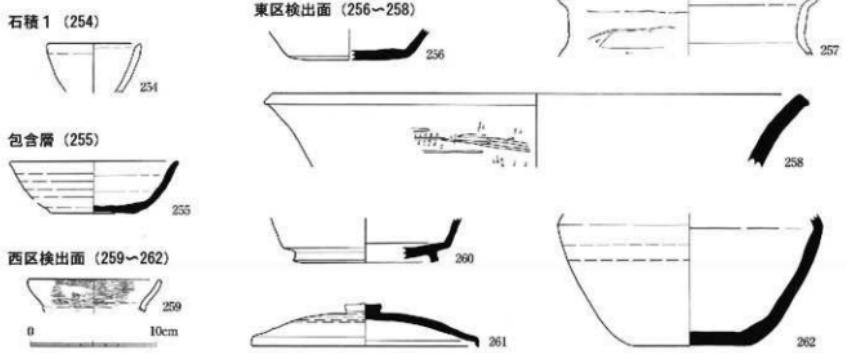
第19図 遺物 (5)



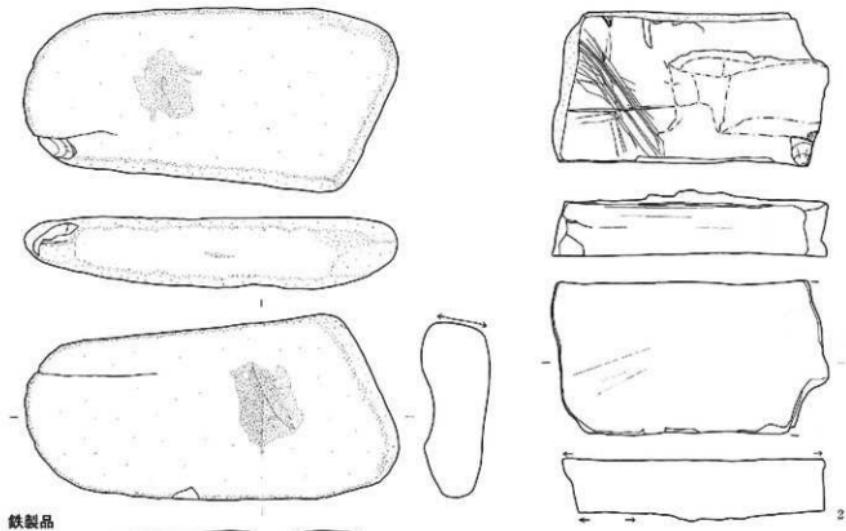
第20図 遺物（6）



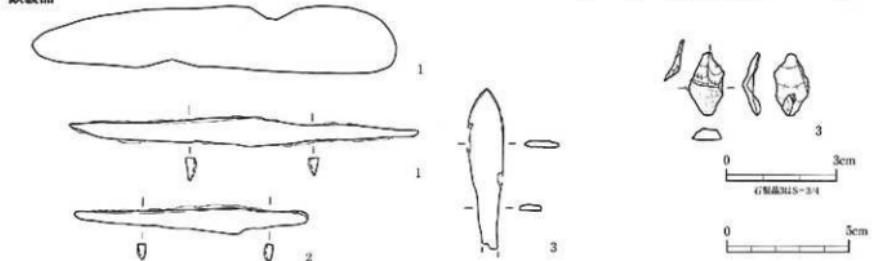
第21図 遺物 (7)



石製品



鉄製品



第 22 図 遺物 (8)

第IV章 総括

1 集落の変遷

今回の調査地点では、古墳時代後期から平安時代前期の集落を確認した。現代の搅乱により遺跡の大部分が破壊を受けており往時の状況を必ずしも明らかにはできないが、周辺の調査地点での成果を加え、調査成果を簡単にまとめておきたい。

確認できた竪穴住居址は古墳時代後期が2軒、奈良時代が4軒、奈良時代末～平安時代前期が9軒の計15軒である。全体的な傾向として、古墳時代後期（7世紀後半）は東区の溝3より西側、奈良時代（3～4期）も東区の西半から西区にかけて分布する。大型住居址の373住は西区の北西隅に位置する。東海産の須恵器や畿内系暗文杯などの搬入品が多量に出土し、床面積も61m²以上とその他の住居址とは異なり集落内でも中核的な位置を占めていたと推測される。周囲には同時期の住居址や掘立柱建物址も確認できず、7～8世紀代に機能していたと考えられる溝6・7がその他の住居址と区画していた可能性がある。平安時代前期の9軒は東区東半に分布し、遺構も重複しながら集中している。今回の調査地から北東にかけて集落が広がっていたことが明らかである。主に5～7期の8世紀末から9世紀後半が主体であるが、住居の構築場所に規制があったのかもしれない。

2 石積遺構1

東区北東隅から拡張区にかけて検出された石積遺構1は、現代の搅乱や自然流路である溝2により破壊され、調査区外に続き全形がわからないなど、明らかにできなかった点が多い。遺構としての問題点は、断ち割り断面で確認したところ石積が整然としていないこと、溝2のラインと一致する箇所が多いことがあげられる。また、北に位置する平安時代前期の374住との直接的な切り合い関係は判然としない。374住は石積1の推定範囲内に位置すると考えられるが、検出レベルでは石積1の最も遺存状態が良い地点より約0.6m低く、374住がつくられた時期に石積1が埋没していたものなのか、直前で角を持ち東に曲がるもののかは現段階では判断できない。

付近一帯の自然流路は南から北に向かって流れしており、自然堆積物と考えた場合、流路方向に直交するように東西方向に伸びる南辺が不自然であり、ほぼ直角に曲がることからも遺構として判断した。石積を覆うように粘質土層が堆積し、わずかであるが古墳時代前期の土器が出土することなどから、奈良・平安時代より古い遺構である可能性がある。

今後、類例の増加や周辺の調査によって性格・時期の特定をしていきたい。

3 出川南遺跡における集落の展開

本遺跡はこれまでに14次にわたる発掘調査が実施されている。調査地点はJR篠ノ井線より東側と遺跡の北側、さらに今回の調査地点を含む南西部の3群に大きく分けることができる。本書では最もまとまった調査が行われている南西部を中心に、竪穴住居址の分布から集落の展開を簡単にまとめておきたい。

南西部では遺物集中などで古墳時代前～中期の遺物も出土しているが、竪穴住居址や掘立柱建物址などの明確な遺構は確認されていない。そのため、第23～25図ではまとまった遺構が確認できている古墳時代後期から平安時代前期までの限られた時期を対象としている。

まず、本遺跡で確認されている最も古い時代は弥生時代後期前半である。1次で1軒、6次で3軒、11次で1軒の住居址が確認されている。いずれもJR篠ノ井線より東の調査地で、地質学的な所見によれば、この一帯は田川の形成した基盤上にのっているようである。1次では、方形周溝墓の可能性もある土坑も確認されている。

古墳時代前期は、1次で住居址が1軒、9次で遺物集中出土地点が2カ所、4次の東半部でも遺物が少量確認されている。古墳時代中期は4次で平田里1～3号古墳、7・8次では遺物集中出土地点が確認されているが、同時期の住居址は確認されていない。

古墳後期（第23図）になると1・10・11次を除く、ほぼ調査地点全域において住居址が確認されるようになり、出

川南遺跡に本格的な集落が展開する時期である。中でも4次では113軒の住居址が確認され、一帯に大規模な集落が展開していることが明らかになっている。これらの調査成果から6世紀後半から7世紀後半までの4段階に分けることができる。1段階である6世紀後半は住居数も少なく、4次では古墳群の西・南側に4軒、5次で1軒確認されている。2段階である6世紀末～7世紀前半になると13軒以上と集落規模が拡大する。4次では流路によって区画された中央に集中し、西側にも広がる。分布の集中は中央北東寄りにある。3段階の7世紀中葉は前段階と同じ分布であるが、再び東側にも住居址が分布する。住居軒数が18軒以上と増加傾向にあり、大型住居の周囲に小型住居が分布している。南側の調査区でも、12次で1軒、14次で1軒が確認されている。4段階の7世紀後半は4次で20軒以上と住居数が最も多く、調査区全域に広がる。また、5次で1軒、8次で3軒、12次で1軒、15次で2軒と南側の調査区にも住居址が一定数分布する。

古墳時代後期を通して分布の中心は4次調査区にあるが、2段階から集落が発展し始め、4段階以降は南側に集落域が拡大している。

奈良時代（第24図）になると8次で8軒、12次で8軒、15次で4軒確認されており、7次でも住居址が確認されている。4次調査地点では該期の住居址ではなく、南に集落域が移動している。本遺跡の南側に位置する平田北遺跡でも該期の住居址がまとまって確認されており、これらが出川南遺跡の該期集落と一連のものであった可能性もある。

平安時代前期（第25図）は1次で1軒、4次で2軒、5次で5軒、7次で39軒、8次で14軒、10次で4軒、12次で2軒、15次で9軒が調査されている。奈良時代に比べると住居数は増加し、東側に移動しているようである。平田北遺跡でも住居址が6軒確認されているが、前時代ほどの造構の集中はしていない。部分的な調査ではあるが、出川南遺跡同様に集落域の移動が推測される。中期は11次で1軒確認されているのみで様相は不明である。後期も1次で2軒、4次で1軒、11次で1軒が確認されているが、集落の中心は北東に移動していると推測される。中世は1次・11次の東側の調査地点で遺物が出土しているが、11次のものは溝出土である。また、11次では火葬施設が確認されており、JR 箬ノ井線より東側には集落が広がる可能性がある。

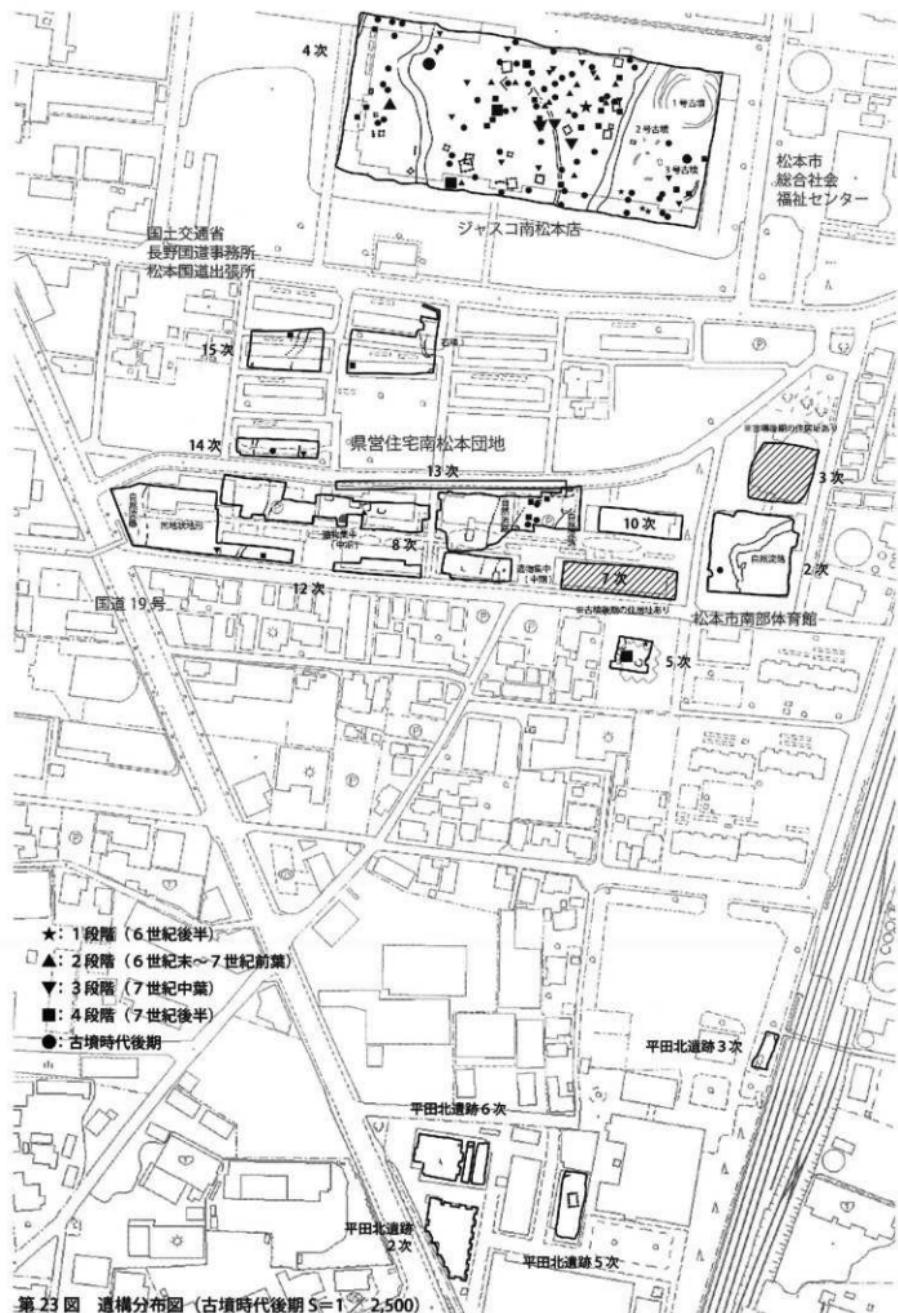
以上のように、古墳時代後期から平安時代前期までを中心に集落の展開を窺穴住居址の分布から推測した。本遺跡は洪水などの影響を受けやすかった土地であったことはこれまでの調査成果から明らかであり、集落域の移動と何らかの関係があったと考えられる。

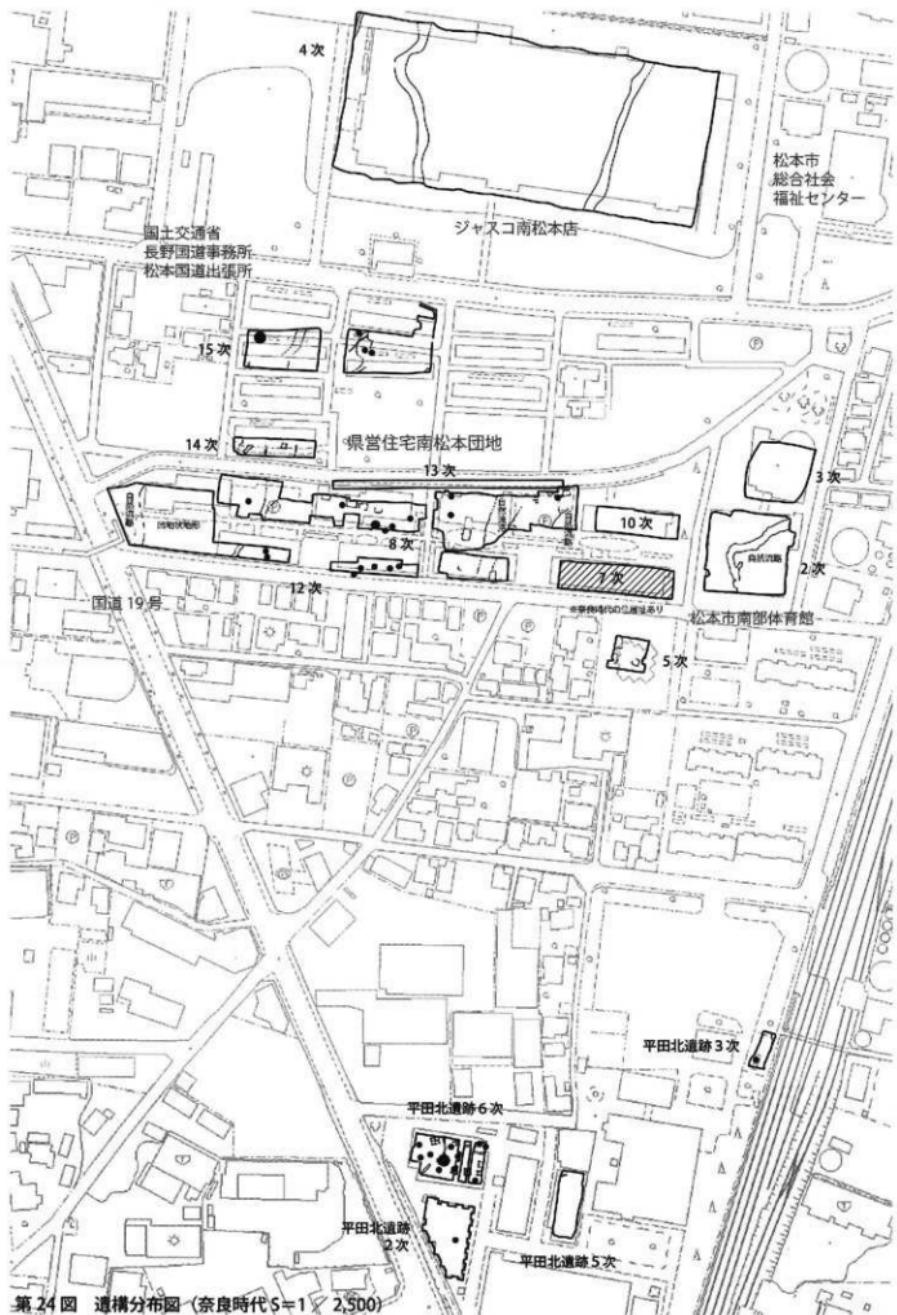
また、本書作成中に第17次調査が実施されており、発掘調査・整理作業が進むにつれて集落の展開が明らかになっていくだろう。

最後に本調査の実施に際して多人なるご協力を頂いた長野県住宅部の皆様、並びに県営住宅南松木団地をはじめ地元関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

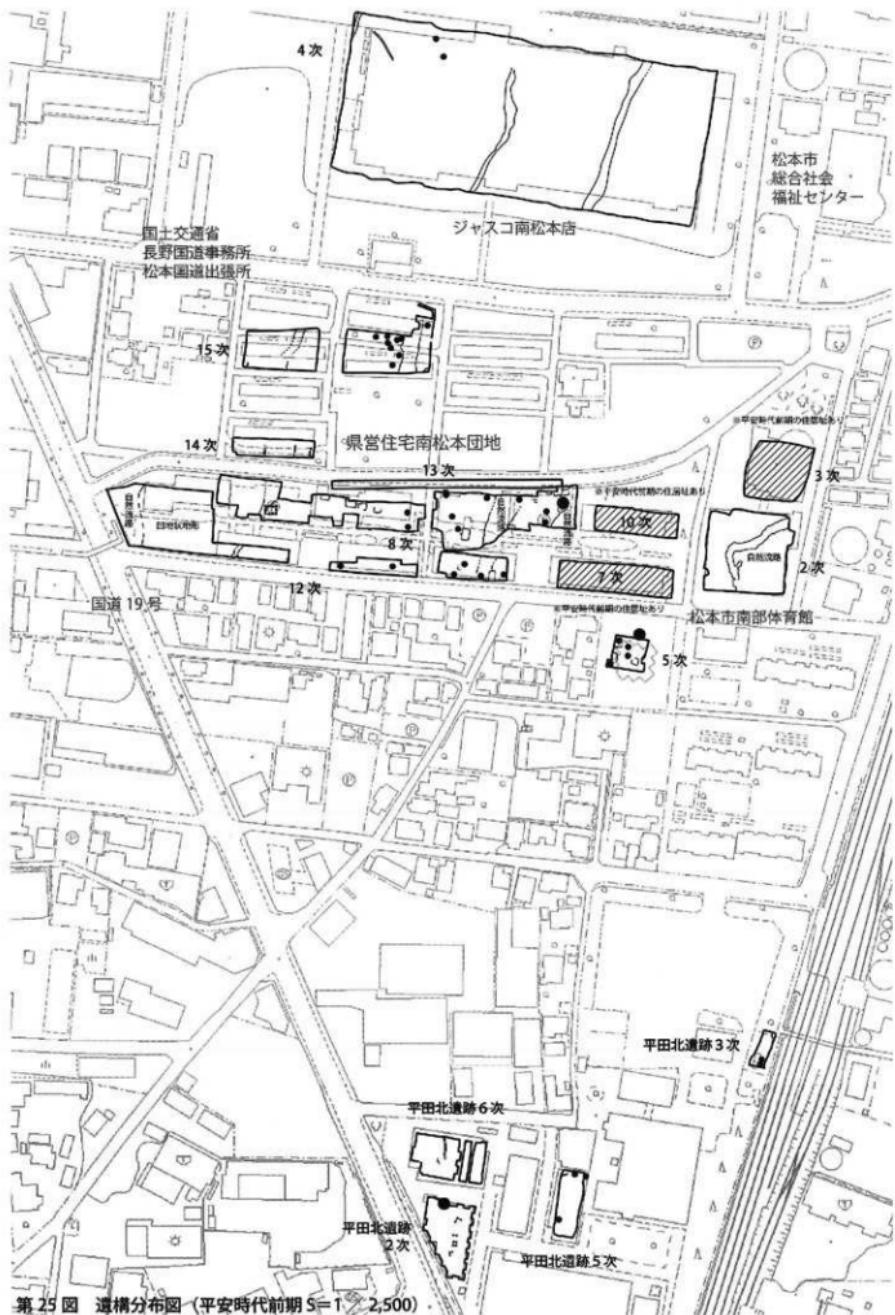
関連報告書

- 1 松本市教育委員会 1987『松本市文化財調査報告No.53 松本市出川南遺跡』
- 2 松本市教育委員会 1989『松本市文化財調査報告No.75 松本市出川南B遺跡』
- 3 松本市教育委員会 1999『松本市文化財調査報告No.139 長野県松本市 出川南遺跡V』
- 4 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告No.147 長野県松本市 出川南遺跡VI』
- 5 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告No.157 長野県松本市 出川南遺跡VII』
- 6 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告No.148 長野県松本市 出川市遺跡IX』
- 7 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告No.161 長野県松本市 出川南遺跡11』
- 8 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告No.158 長野県松本市 出川南遺跡12』
- 9 松本市教育委員会 2009『松本市文化財調査報告No.198 長野県松本市 出川南遺跡 第14次発掘調査報告書-』





第24図 遺構分布図(奈良時代 \$=1 2,500)



第25図 遺構分布図（平安時代前期 S=1/2,500）



東区全景 完掘状況（西から）



東区 穫穴住居址分布状況（北東から）

写真図版 2



西区全景 完掘状況
(東から)



西区南半 完掘状況
(北東から)



西区北半 完掘状況
(南東から)



東区 積穴住居址重複状況
(南から)



362 住 遺物出土状況
(北から)



373 住 遺物出土状況
(南から)

写真図版 4



361 住 カマド 遺物出土状況（西から）



362 住 カマド 遺物出土状況（東から）



362 住 カマド 検出状況（南から）



同左(東から)



363 住 遺物出土状況（南から）



363 住 カマド・P3 瓦出土状況（西から）



364 住 遺物出土状況（東から）



364 住 カマド 検出状況（北から）



364 住 東カマド 完掘状況（西から）



365 住 磁検出状況（北から）



367 住 完掘状況（北から）



367 住 カマド 遺物出土状況（西から）



368 住 掘削状況（北西から）



368 住 カマド 遺物出土状況（南西から）



369 住 完掘状況（東から）



369 住 遺物出土状況（北から）

写真図版 6



369 住 カマド 遺物出土状況（南から）



369 住 カマド 半掘 土層断面（東から）



370 住 遺物出土状況（西から）



370 住 土層断面 東区北壁



370 住 カマド 遺物出土状況（北から）



370 住 カマド 完掘状況（西から）



371 住 遺物出土状況（東から）



372 住 カマド 検出状況（西から）



372 住 カマド 掘削状況（西から）



372 住 カマド 煙道 掘削状況（西から）



372 住 カマド 煙道 磕検出状況（北から）



373 住 遺物出土状況（東から）



373 住 遺物出土状況（北東から）



373 住 174 出土状況（北から）



373 住 189 出土状況（東から）



373 住 183 出土状況（西から）

写真図版 8



373 住 190 出土状況（南から）



373 住 193 出土状況（北から）



373 住 完掘状況（西から）



374 住 カマド 遺物出土状況（東から）



24 土 233 出土状況（南東から）



27 土 上層 遺物出土状況（西から）



27 土 237 出土状況（北から）



27 土 238 出土状況（南から）



溝1 完掘状況
(北東から)



溝6 磚出土状況
(南から)



溝6 土層断面 西区北壁

写真図版 10



石積 検出状況（南西から）



石積 検出状況（北西から）



石積 検出状況（北から）



石積 基底面状況（北から）



石積 基底面 石列か（北から）



石積 断ち割り 石積状況（北から）



石積 下層 土器出土状況（南西から）



石積 断ち割り 土層断面（北から）



石積 石列 検出状況（東から）



石積 石列 立面（西から）

写真図版 12



東区北壁 土層断面



東区東壁 土層断面



石積・溝2 土層断面
(北から)



373 住出土遺物



6



21



23



24



25



29



61



71



71 墨書



73



95



108



36



37



71 刻字

写真図版 14



48



116



133



134



190



191



192



193



88



112



123



124



125



181



183



186



188



189



1



11



12



39



40



41



42



46



78



79



96



99



100



161



163



167



172



173



174



175



233



234



56



130



137



49



50



149



236

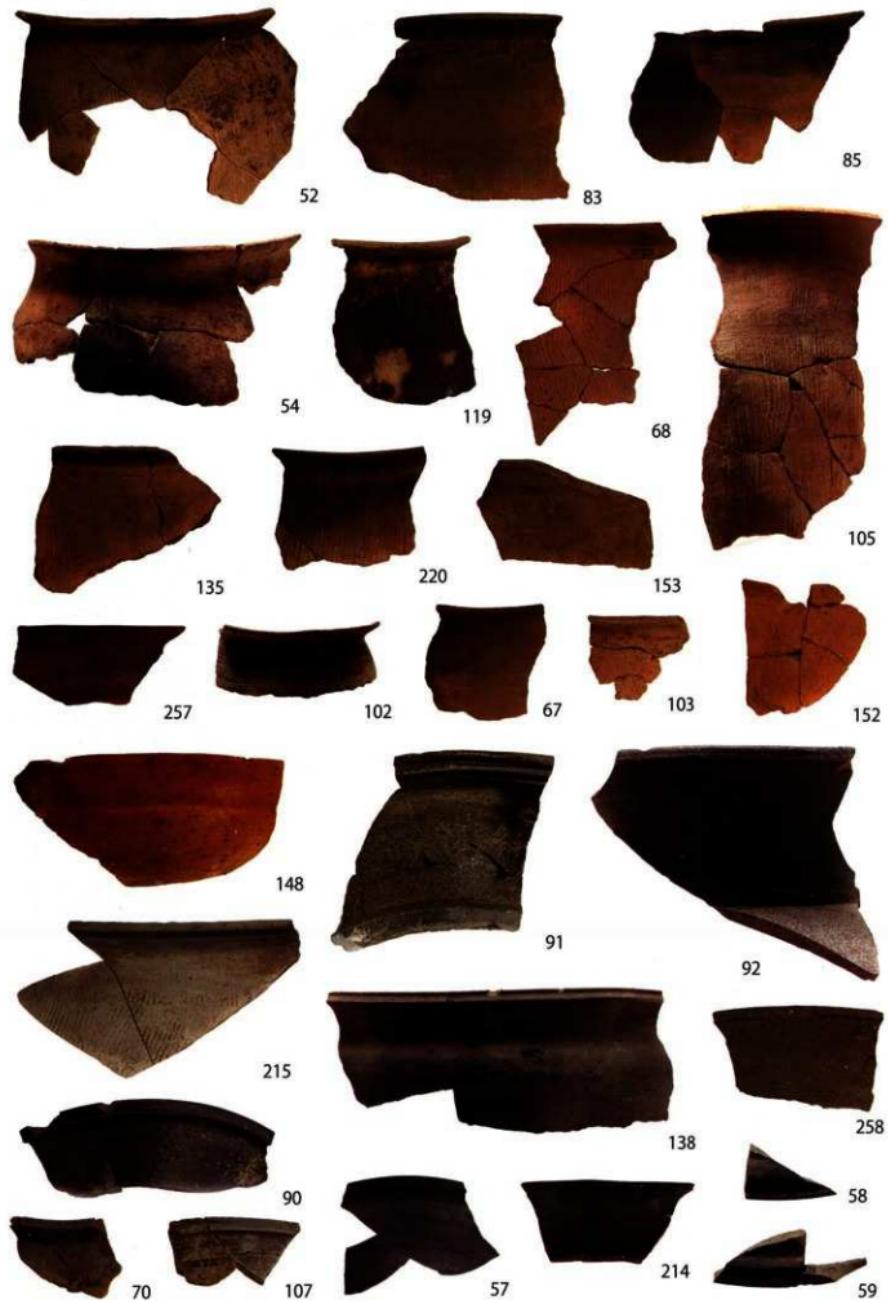


142



237

写真図版 16



報告書抄録

松本市文化財調査報告No.207
長野県松本市
出川南遺跡
--第15次発掘調査報告書--

発行日 平成23年3月31日
発 行 松本市教育委員会
〒390-0874
長野県松本市丸の内3番7号
印刷 株式会社 二光印刷

